

甄
han

序——若い晩年

中田満帆

寺山修司が『祖国喪失』を詠んでから、半世紀と12年もが経っている。かれが《青春は質問、そして回答は歴史だ》と書いてから、半世紀と4年もが経っている。22年の黝い街を漂う疫病や、隣国のきな臭さのなかで、わたしはふと、ひとはみな若い晩年を生きているのではないかとおもう。「若い晩年」——過去から現在に至る道程を見失い、回想、あるいは虚構のなかにのみ現実を見いだそうとする寂しい試みに溺れてしまったように感じるのだ。もちろん、これはわたしひとりのおもいであって、それをこの場で一般化するべきではないだろう。寺山は《過去は他国》といい、いつぼうで《人生とは、一つの劇的エポックを核とした別の人生の集積体である》とも書いている。わたしはきつと核を見失い、他国へと漂流しているのだろう。ふり返っている場合ではない。そうつよくおもう。なぜなら、《うしろには夢はない》からだ。短歌という表現に出会ってから、しばらくは自身の歌をインチキとおもって憚らなかつた。文法や語法のまちがいに絶えず、怯えていたし、じぶんにとって本流の表現とおもえなかつたからだ。それでも第1歌集『星蝕詠嘆集』を上梓し

たあとには腹を決めて歌をつくっている。

短歌の律はものによっては陶酔を促し、ものによってはただ歯切れのわるさだけで終わってしまう。表現によっては銜学的なだけで終わり、日常描写や、キャッチコピーもどきで終わってしまう。わたしは遅ればせながら、オーセンティックで、過去と現在を繋ぐ、接ぎ穂としての歌を集めてみようとおもった。それがこの歌誌である。果たせるかな、わたしはほとんどやけっぱちに歌詠みたちへ声をかけ、ここに寄稿して頂いた。

わたしがいま望むのは胸が痛くなるほどに詠み手の内奥が剥きだしになった歌、孤立を超えてゆく愉樂を伴った歌である。静寂を突き破って聴くならば、そんな歌こそが必要におもわれるからだ。

永遠に生きるよすがも見当たらずみどりの鳥の羽がひらめく

けつきよく、わたしがいいたいのは、たったひとつ、「我慢はよせ、野心を見せろ」ということだ。それが理論などというものを持たないわたしの唯一の意志である。ひとびとの孤愁に訴える歌を詠みつけていきたいものだ。そして短歌に於ける野獣派^{フォーヴェイズム}を確立したい。永遠のマイナーとして。若い晩年を生きる、愚者の痴性として。

歌誌「帆」《初号》 2022 夏



序——若い晩年 (2)



- みどりいろの窓/U-REI (4)
夜歩くただ歩く/うたたね 宥樹 (8)
長い腕のなかのおとぎばなし/奏多めぐみ (9)
流れ/朝 (14)
星色の産毛/手塚雄呂血 (18)
夢が断たれて/皆川健二 (20)
蜜月関係/鷹枕可 (24)
無題/柳煙 (33)
〃/きのゆきこまち (36)
いつまでも遊んでいる/帆場蔵人 (38)
般若的慟哭/安西大樹 (40)
たましひなりき/帛門臣昂 (43)
花を剪る/中田満帆 (46)
歌人素描/花島大輔 (52)
甘ったれたヨハネたちへ/犬飼うろ子 (63)
内なる鬼を放つ～《水野しず》をめぐって/うたたね 宥樹 (64)
邂逅とはかつての傷口をひとつこじ開ける簡単な作業/帆場蔵人 (68)
作品雑感/井上橙子 (69)
ライトヴァースは歌を見失った/中田満帆 (73)
自由欄○腐敗性政治的猥褻物/下山陽造 (77)
短歌について、作品について、歌誌の印象について○参加者座談 (81)
参加者来歴 (102)
編輯後記 (104)
告知○ハイティーン歌集・募集 (105)



みどりいろの窓

U-REI

*

かげひとつ 街のなかから掬いあげ
いま左手の森に投じる

あえかなる星の棲家よ夜というイレモノあればぼくも入りたい

まだら雲 西の空にて揺蕩えばまだわれ知らぬ旋律を聴く

かすかなるときさえずり 終わりとはすべての罪が贖われること

川魚 逆さに泳ぐ川上の 祈りのような水の満ち方

神秘体験する電話ばかりの回転するデパート

わがために黒髪洗う乙女らの心臓深く眠れる森は

かぜのなかおのれを責めて歩きつつ座標のちがう人生おもう

眠れわが亡霊 ゴーレムとともに街をさまようなかれ

星づくめ 仮面のなかに展開する高架道路の夜のランプよ

冬歩く 回想ばかり 人生はやがて墜落する真昼

火祭りの果肉ひとつが腐れゆく だれもないという事実

坂道の途中がいまだ描かれず 空白に落ちるひとびと

水瓶の大きな月夜　たとえればひとの重みに昇る新月

言葉なきわれの地平に訪れるものあれば鳥を撃て

ひと夏のおもいでありぬ森を抜けたら一面の水

あなたの水のなかを歩いてわたしが訪れたのは幻灯機

ふいに襟がゆれる　たったいま閉じた心から風が吹くのだ

頬熱くかぜのなかにて立ち止まる　だれかがぼくを呼んでいるなら

永遠を知らない真昼ひとりのみタクラマカンの砂上に光る

映写技師不在のなかに重なってやがて光の一部となりぬ

レズビアン 猛獣使い 売人は煙のように消える夢かな

見えるもの 見えざるものむこうからかもめが飛んだ土曜日の朝

霰降る寂しさばかり天啓の彼方にいつか街が舞うかな

たそがれが劇中劇のようにある駅前広場の案内板たち

みどりいろの窓 明るくなるころの潮時をまだ知らない。

*

夜歩くただ歩く

うたたね
宥樹

もの憂いねふらり踏み出し夜へ発つ商店街に想う月草

手にふれる夜かきわけて胸過る思いあつめ佇む国道

夜あおぎ星に慄える誰の内なる子どもにもツイフォンはくる

盲導鈴過去のすべては現在にあり夜を這う祈り時間に遊ぶ

うち響く律動のままに夜歩き自由練り上げ自在を生きる

長い腕のなかのおとぎばなし

*

わが冬の細雪さえ遠ざかる二月の真午手のひらに落つ

だれもないひざかりにただ忘れられ真っ赤な靴のヒールが黒い

夜露照らされて窓いっぱい光りの粒ばかりある夜半すぎれば

大鳥の来る日来たらず一壇のインクぶちまけたような夜が訪れ

帽子という一語は比喻だ、こうやって追い放たれた顔を匿う

奏多^{かなた}めぐみ

腕長き男のなかに抱かれてわたしのいまを葬り去りぬ

夢に視た、塚本邦雄その貌は決して眼鏡をかけてなかった

どうしてだろう？——花壇の埃ばかりが眼に留まる週末の夜

牛になりたい石になりたい願うなら黙って茎を握るがいいさ

とどまればかりいるかないつのまにきみへの手紙棄ててしまった

わらの犬——燃えあぐるとき人心の脆さをおもうことと告げたり

求人を手漁るばかり夜越えていつか軛にありつくまでは

摘みゆきて花のなまえを忘れたる男のひとりかくれんぼする

大父の死を待つ真昼叢に片足のない人形がある

風はるか地平にあふれたたかに奪い去るのかこのおれでさえ

荒れ野にて、映画館にて、西部にて、冬の潮音を追いかけてゆく

おもかげをかせに与えて去ることのうれしいような寂しさばかり

苦笑うぼくの愁いはやがて飛び展開図面のようにひろがる

それでなお消えてゆくしかないという声が聞えて来る棧橋へ

からたちの花の雌蕊のなかに埋もれたくおもえばかつて逢えたひといて

雲沈むゆくままにしてぼくはぼくの愁いを日給袋にしたためるのみ

だれがまたぼくを呼ぶだろうか意識する脳髓のなかのかたむきなどを

たまさかの光りのなかを鯨泳ぐ つかのように泣いてみたいよ

黒々と波打つ夜よ 星のない都市の澱みに月をください

飛ぶ鳥がわれを連れ去る夢はるか目蓋のうちに輝いてゐた

夏の死が家政学科を侵すとき、制服の裾わずかにゆれる

わたしという一人称を切断する踏切あかず取り残されて

崩れながら母を呼びいて土に伏す永訣ばかり頭蓋にありて

友だちになれなかったね けっきょくは雨上がりの街かも知らず

甲虫の翅を筆って占えば、あした一日天使になれず

通学路かつての友を追いかけて草迷宮に攫われた朝

ないがしろの花ばかりがわたしの手のなかで凋れている

夜の蛇 わたしの首を絞めに来る殺意を超えたやさしさなどと

*

流れ

*

耳を食むやさしき風も過去のもの（あの電線に止まる小鳥も）

名も知らぬ野火の名残りに憧れてましろに歩く海への道を

人を指す指にも意味はないけれど血が流れてる手のひら開く

あかねさす町はいつまで生きていて眠たき森に映える動脈

かたすみに水の湧きでる場所もある　あすにはあすの雨漏れがある

朝

指先で触れていました色褪せた画面に映るゆめのあとさき

終わりなき冥府はとおく蜜蜂の旅路のための花束が咲く

星は去り際にも泣いて雨ばかり降らせる何億光年先へ

このさきにおいてもぼくはぼくのもの濡れた水彩色に触れつつ

きみの目に紅蓮花かおりしずかなる体温計は赤く染まりし

言葉とは触れずに軋むものばかり揺れいる鈴の嬌声のごと

はじまりの日にもおわりの日にも咲く季節のための花（草冠）

月面に余震のかけらきらきらと煌くぼくの微熱のなかで

ひかり食む獣の群れは黄昏の夕日に染まり思い出を駆る

朝焼けの潮の匂いは閉じられて海辺の距離を綴じる靴ひも

糸電話あめに触れてもささやきのごとくしたたり小人は歌う

少年の語りはとおい耳の向こう 流れる水の話がしたい

この風は不意に重みのあるようで恋人の背に枯れ葉が実る

日焼けした文庫本にもまだ息はありあの森に帰れる日まで

あいになる鳴らない鈴の藍になるしずかなひとのあいには答える

冬に祈る少女の指は凍みていて野に咲く花を数えてました

約束はだあれも傷つけないはずの両腕として枷を授かる

夜の雨 死者すら数えきれぬ音きかせて欲しいいつかのために

*

星色の産毛

手塚雄呂血

*

星色の産毛のなかに靡いてる・ぼくのうちなる肉欲なども

つらいことも淡いことで中和できればいいと水源の水脈猶も逆らう

いくつもの葡萄の繁る高みよりわれにふりかかる怒りの果肉

ただおもうことの恥じらい遠泳の犬のいっぴき波に消えゆく

定めより欲しかりし永久よトラクター赤き真午のそのままにみて

遮断機が降りつつあって少女すらその例外にならずと告げる音

葉を嘗める苜蓿の少女らのいつか鬱々としたかえりみち

父踊る愛なき男ひとりのみ窓を見下ろすダンス教室

あしたまだきみがいるなら草の葉を読んでみせよう・アメリカの歌

生きていくことしかできない・葉桜の・合鍵ひとつ・落ちてしまった

*

夢が断たれて

皆川健二

*

うつし世にきみがなからば草もなし夜の点火をすべて消す2時

ひとめすら逢わぬひとこそおもいたる月の枯れゆく秋の終わりに

秋驟の余り字あればかのひとの墓にむかつて静かに投げよ

瑕すらもきらめきならぬ潮騒のうたが聞ゆる唱歌のごとく

地平にて校歌を唱う子供らの頬瑕濡らす秋の和平よ

夕月やひとりのわれを手慰む光りの幾多両手に零す

終劇の二字のむこうに立つ人よわれまたひとり虚構に棄てる

寒椿ゆれる花びらかざしては下校途中の子供を過ぎる

花ひらく空き罐ひとつ蹴飛ばして葬りたいな悔しさだとか

茜差す建て替え工事更地には猫いつぴきもないゆうぐれ

真夜中のスーパーカーのようにいま流線型の走者現る

天使とて苦役のさなか駅前で海鮮丼を食すひととき

署名する 失踪届 左手はふるえてやまぬ夢のなかでは

水充ちてリボンのひとつ落ちている商店街の終わる地点で

頬を打つかぜの幾多が町を過ぎ、いまに見てろと吐き棄てている

幸福のないあどけなさ土塊を両の手にする迷子の群れ

だれもないのだという感じがして冷凍蕪を鍋に投じる

雛菊の花から黄葉うつろいのさなかにあつてさなかになし

玄人のカード捌きを見物す ハートのエース現るるまで

春を待つ尼僧ばかりの地下鉄を降りてひとり和すみずからを

あれはなんでしょう。電線に架けられたハンガーにTシャツ

火ぶくれのような顔して寒中を歩けども届かぬ河上

かげが立つ真午の舗道幾人の不在をそれが報せてくれる

乳母車が止まっている 倒れた標識の明るいほうにです

夜はいま鮭のごとくに銀色の裸体を見せて丘を登れり

*

蜜月關係

鷹枕可たかまくらか

*

舞踏病去りても異端審問割礼儀をシンジケートと呼びたまへるな

*

主題提起

不文律、宗教概念に於ける愛と貨幣の蜜月關係に附いて

*

岩窟継母がんくつけいぼ

埋葬費をりしもてなぐさみに潰ゆ罌粟は防火壁のもとに額づきぬか

放蕩の返済が果追はれつつ葡萄園ぶどうほに序せる福音、鳩卵きゆうらん

小約翰しょうよはねまぎらはしくも膳本ぜんぼんへ添すゆる叙階じよかいもみわけがたかり

娼婦私生児しかれども父祖ふそに肖にてはなやかなる頬 実じつを銜くはひて

纏まとひ附つく百合の喩よへのいみじからば雁の凶形はくづれかへりぬ

をとうとの孕ねまる闇やみの闇やみの間の受胎の馬の姦ねしきかな

眞贋虚実

血潮こそ苦き追銭更しげやらざる夜は乳香の香のみどりごを愛しめ

紅海緋べにに歿しす奇跡爾後に辺獄へんごくに下りたれ戒律かいりつの巖肌いわひだよ

しめやかに罪へとそぼつ偽書もなくば返済金15枚を釈明に充て

裏切りものどもの季節こそ華美たれ青年の今豹変にたぐへる真贋

争論の絵の耶蘇やそふふめなば十三の錫杯血しやくはいを糾はば功利より醒めむ

桃花源

ひらがなのやみをひらかば三面鏡にあはくもくづほれるほどをうつしみ

基督みづからをこころみれば寂寥も砂の孤絶に費ゆ 奪ふな

遠浅にひとは寄せかへる錆の舵いつ喪ふも知らずなく鷺

今際にも引き裂かれたる現へと歩めればゆめかへれざる 桃花源

梨の花いろづきにけり遙かにも過越をもだしやらばほころべる戒律、死後生

記念建築

手繰るれば芋環の緒のはごろものたゆたふみづにさへ絶えなむか

無花果に実るものなき春闌けて死後とは昏き明にかたむける濫觴

うつろへるはなくづへ今はひむかしの羅馬にふさはしからざる薔薇の熾りを

瓦礫さへひとの名残か黒鍵を撃たば水底に茱萸散りばふ石畳

陶酔は在りうらば死へいそぎゆく砂のつまびらかなれ、記念建築

偽約福音

売る為に買はるる贗作額縁の死海の花は蝕みぬ。残すな

強姦魔若からば美しき鼻梁以て驕りつづれよ一世の丈を

嚙下さへいなみぬひとは球体鏡の内に外につるされたる殯宮ひんきゆう

無為ならばこぞれる者もまばらなり市街劇へ忌憚なき飛礫花ひれきか

若書きの憎しみをかつてかこちたる降灰に重爆撃機の鉤十字

雪柳花序

救済はことごとく死におとずれぬ生きて在らば衣擦れの音をたて

水葬非ず 櫓もうち絶へらば喝采さへ礫に聞こゆる霊柩にみて

机上にて月みちたれば幻想に育まるもの 一体の蜂巢、鳩卵 狂気

静物画ばかり引ききたる型録かたろくのえらばれざるからこそはしき白百合

聖骸布めぐりいたらず外つとつくに邦の鶏頭もまたいろめきかへり

雌雄とはかなしき砂の音へいたる早鐘の罅 さけてかへらず

投壘序花

亡き人はいづれにかへる雁音の聞かなばたよるすべなきはたて

花の色尽くしたるとも音楽の美しき理由をしりそむるつてなく

群衆の靴は櫃かの花邦絶ゆるともほころべよ衰亡にそむきて

つぶさにも枯芝に紛るすずめらのはかりがたきはなづきのうらへ

主題なき遍在の意義を問はばうちつけにやはらかきわたつみの音

ひと絶えてなほ記すべきあをぞらを互る孤独へ 名さへ残らず

群島標本

終世救済に費ゆとも恩寵のあらばこそかずしれずつづく常冬の膚はだえ

砂時計ひとつぶの鉄をうづめてはかへらざる幾多後悔を閉づるに

函ぶに蝸ゆ 砂糖漬かのごとく旧ることもあらざればあれ群島標本

鉛えん白ぱく鈍どんき肌の跡を追ふなかれブオナローティが男娼の頬

亡骸も邦も果実も麵麩も腐し果てても永続を越えられぬ その後さへも

橄欖投薬

水際のゆふづつに染み聞きてをり雑音は瞋しん恚に 無音は棘、菊

いなむれば巖いをわをたばしる血のみづもたぐひなきかのはつはなと見ゆ

花圈かけんにて告ぐ 杙くいせのごとき列柱を離宮へつらぬるかの建築史を

箱舟に通るる晴着 花婿の爲に喪かんらんふ橄欖かんらん記録

呪はしき奇跡齒痛のさにも沁む医院に挿すすなりの蛾蘭がらんも在らば

みづからの内を愛づる陳腐へ殉じては実名も無き贋作に暮るるのみか われは

*

無題

*

死を臨み気の霊を食べ闇に酔い震えた声で鏡を移す

随神生活してるつめを切るきったはったで螺旋はまわる

死の灰を被りし夢に嗚咽あり天の燦から陽はまた昇る

宝石の零れる夜に盗賊が倒れてるのは満月のせい

掬いとは闇に紛れて散ってゆく鮫の花々硬質の鳥

柳煙りゅうえん

遙かには満月碧く侵食し空の彼方へ潜りゆくかな

運命は書物の中で燃え尽きて微笑む人に走る稲妻

混沌に沈む死体は横たわるダイヤモンドの凝縮する日

子宮より生まれいずるは山椒の葉っぱにしたる泪の海よ

神経は衰弱重ねソプラノのあいいうえおから死の韻律が

イチジクが人間を喰う甘い夜空に飛び込むペルシャ猫あり

幻影に赤い絵の具は落とされて少女の顔を曖昧にした

魂は空に吸われて神様になろうと思う少年一人

神の子よお前の夢は破られてさめざめとする午後の夕陽よ

清水に身を投げおつる花ならば管楽の海すべてはかえらん

神の白くきのさくつみ栗のため弥勒のための雷鳥のこえ

うすもれにちびたちあそぶうんめいはまわるまわせよこまのなかには

ぶらぶらとてんぶらあげるたつのこよろくすみたるゆきのあわたち

ばらそるをぶるぶるぶるうこびとたちなんびともなくなみだにしずむ

*

無題

きのゆきこまち

*

風鈴という名の硝子くらげ Heat Galapagos Island 絶滅してく

浜跳ねる足はイルカのよう 砂の飛沫も波に消えて凧ぐ浜

山はみなそびえくずれて山なみは畝うねる波うねる海原

腑抜けだと思ふよ君を 「ふざけんな」「ざけんな」にして吠えてる君を

知るべきでないことぜんぶ腹黒の君のお腹にある ありがとう

好きだった人の下駄箱だったとこ 知らない人のネームプレート

人通り絶えた夜中の駅前
の雪を導くだけの外灯

くさはえるJAXA
蹲う筑波
嶺でISSへ愛叫ぶとかwww

*

いつまでも遊んでいる

帆場蔵人

張りついたまま乾涸びた快晴 お前は馬鹿だうすばかげろう

もうみえずことばにならず絶えず鳴る血潮のながれ海慕う声

深呼吸、影を潜めた老い猫の鳴き声にまた、深呼吸

かちやかちかと箸が鳴り 眼を刺す腹を探る 骨まで焼いて啜う

蟹横ぎる田舎道 振り返るたびに手がなびく じゃんけんぽん

一列に並んだ向日葵がざわつくたびに 夏を脱ぎすてる影

針落ちる 音さへ響くこの夕べ 誰もが口をつぐんで齧る

地図を踏みナイジェリアに立つ君とスエズ運河で睡る幼な子

縦にして横にして逆さに振ってもなにも出ない 耳を塞いで

放置自転車のかなしみをドミノ倒しでソラミレド、ざまあみろ

塔、いつまでも塔だ いつか倒れるときも塔だ、まるで俺の墓

みなゆかに ころがりねむるよがおを みるものもない みがほろびて

般若的働哭

エターナル桜シャインの春の屍しと 夏を懐胎する紫陽花と

弦音の厳しきままに我は生き時の矢柄を綱渡りする

艶めく蟻が嗅ぎ回る死の輪郭は蚯蚓みみずをさらに蚯蚓にするが

獅子吼する仏陀のような墓石よグレイトフル・デッド流れるイヤホン

幾度目の自慰であろうか閉じ忘れ朽ちること無きヨブ記の頁

萼から花卉、子葉から葉列、離人するたましいの形態学と雨

安西大樹あんざい だいじゅ

泥濘に靴の減り込む夜の果て白きオベリスク勃起中枢

粉々に血族の散る音となり掌の雄性配偶子

澄む川よ財布に軽き銭数え夏の盛りに靴音も無し

シベールという名を隠し七曜を生きし男の擬態たのしき

憂い日のわが盲目のイカロスは色彩よ乱調たれと云う

牛の影を踏む鳥の影を踏む虫の影を踏む 搾取とは何か

夕鐘はゆたかり音引く後先のない生活の千切れた尻尾

味噌汁の中にお箸を挿し入れてしじみの殻をつつきつづける

死の声は野分より疾し病室の我は詩集を読み終わりたり

終わり無き痴愚に招かれこの私の漸近線となれベッド柵

難消化性デキストリンの殷賑いんしんの陰にてルサンチマンとたわむる

マロニエの樹の根を見つむ我ロカンタン則そくてんきよし天去私のタスクの凍結

撃つべきは清貧思想の胸ぐらよ玉蜀黍の粒のひとつぶ

夢に見しにわとり私の枕辺に小さき柩を置き去りにけり

たましひなりき

*

はつ夏の風に乱るる額髪を直しし君がわれに向かへり

いまだ乾かぬ思春期の血を拭ひつつ開け放ちたり夏の扉を

森閑と濡れたる橋を渡り来て既に刃を握るか君は

若さとふ暴力性を表して大噴水は天を掠めぬ

夕光を拒むがごとく葉桜の樹冠の裡は翳りてみたり

滝を見る心地してをりブラウスのそびらに滲むる汗を見るとき

秘事多きままに語らふ背後にてあまたそよげる昼顔の花

ぬるみゆく鏡へ腕を差し入れてやがて行きたし別の夏へと

病むほどの恋を知らざる声ばかり 日陰の窓を黴覆ひゆく

黒揚羽昇りつ墮ちつ目指したる丘の上には溽暑の虚空

炎昼の汗のにほひを嗅ぎにけり君は神ならで人の身を持つ

滅亡のごとき夕焼けを仰ぎつつ君が月事の痛みを語る

昏れきりし樹々の裡より闇抜けてわれらより立つ原始の臭ひ

晩夏光交差するなか別れしかば互ひに默契をいつか忘れよ

君が血の熱さを知らず常にわれら正しき距離のたましひなりき

*

花を剪る

中田満帆

*

わがための墓はあらずや幼な子の両手にあふる桔梗あるのみ

いっぽんの麦残されて荒れ野あり わが加害 わが反逆

暴力をわれに授けし父老いる 赦さることなきわれの頭蓋よ

青すぎる御空のなかをからす飛ぶ 去りぬおもいを飛びぬけながら

葉桜もちかくなるかな道のうえ鳩の骸をふいに眺むる

ひだまりのなかで瞑目する 响まじるらしさにだまされてみて

蛇泳ぎ毒撒く父のうしろにてもっともやさしいときを失う

愛語なきまま暮れゆく晩年よ古帽子のごときものかな

望むのは不在の灯り われのみを温めて慰むるものなり

ぼくもまた充たされながら誤解する花のなまえの由来について

中古るのガットギターが吊さるる解剖美術図鑑の上を

くれないのくちびる 噛んでまざまざと蜜の滴り眺むる夕べ

街歩む青葱色の外套に過去のすべてをまきあげてゆく

装丁家校閲係印刷工作者の悪夢いま売りにでる

銃後にて向日葵が咲く戦いのむなしさを噛みしめるのみ

胡葱あはつぎのような素足でバレイする少女のひとり暗闇に声

春菓子の匂いのなかに過去を見る男の頭蓋いま回転す

花どきの督促状や森をでるかつてのように裁かれながら

旅枕玻璃戸のなかに父母たちの悪霊ばかり見し夜よ

天秤のうえを切なくゆれる石わが魂しいの代わりなりたり

草原に馬が一頭走るなかソーダ水の泡が消えゆく

時沈む軍国兵士募集広告日当¥5万2千より

葡萄の実が爆発する夜 ふいにわが腿のうらにて蜘蛛が這うかな

翳る土地 窪みのなかに立ちながら長い真昼と呼吸を合わす

悪しき血がわれを流ると大父の言葉を以て出るかな 家を

瘤のある人參ならぶ店先にわれはたたずむ人參のごと

地下鉄にゆられる少女ためいきがやがて河となり馬となる

岸辺にてきみがいるならわれはただ永久に語れり虚構の歌を

真夜中の菜の花畑が帯電す 手を伸ばしてはいけないところ

死んだものさえも愛しくなりぬ五月のみどり駈けぬけてゆき

梨熟れる十五の歳のあやまちを仮面に変えて歩く夜なり

大根の葉っぱを茹でる過去たちと和解せぬまま一生を得て

舟に棲む かぜにゆられて語ることに水の匂いが充ちて

沈む石 ものみなやがて忘れゆくわがためにあれ固茹で卵

散骨のような^{あざみ}筋が咲き誇る冥府の午後の世界線かな

燕子花かきつばたふるえるような輪郭を見せているわれにずっと

聞えてましたか ぼくがいままで翅のように呼吸していたときのすべてが

たとえば閉鎖病棟 受話器もて叫びつづける女がゐたり

初夏はつなつのことばのかぎり愛を問う死を待つような静かな通り

心ばかりの花さえも剪られ一瞬のさむざむしさよ

花を剪る花を剪る花を剪るそう告げて行方知れずの男

*

歌人素描

花島大輔

U-REI

《故郷を甘美に思うものはまだ嘴の黄色い未熟者である。あらゆる場所を異郷と感じられるものは、すでにかんりの力を蓄えたものである。だが、全世界を異郷と想うものこそ、完璧な人間である》。

これはサン・ヴィクトルのフーゴ『ディダスカリコン』にある一節で、エドワード・サイードが『オリエンタリズム』のなかで（アウエルバツハからの孫引きというかたちで）引用していたので、知っている人も多いただろう。「全世界を異郷と想うものこそ、完璧な人間である」という教えは、宗教的にはむろんのこと、倫理的にもあるいは哲学的にも応用可能な、ひじょうに奥深い言葉であるが、なにより詩人の天質を説明した言葉としてこれほどの確なものをおぼくはほかに知らない。

*

U-REIもまた「全世界を異郷と想うもの」のひとりである。その魂の遍歴をまとめた『みどりいろの窓』は、無援のStrangerの孤心と疎外感とがどの歌からも例外なく聞こえてくる。

かぜのなかおのれを責めて歩きつつ座標のちがう人生おもう

火祭りの果肉ひとつが腐れゆく だれもいないという事実

言葉なきわれの地平に訪れるものあれば鳥を撃て

こうした無援の疎外感、環境から強いられたものでもなく、また主体的にみずから選び取ったものでもなく、端的にそこに存在し、それがまるで召命であるかのように従順に受け入れている、といった印象が強い。そのためかどうか、どの歌も落ち着いた筆致で、悲愴感希薄であり、むしろ詠嘆に流れることをつとめて峻拒しているようにも見える。これはおそらく、周囲の世界からただけではなく、自分自身からも身を離そうとする意識の二段構えがあるからだろう。実体のないところ、情緒に惑溺する余地はない。「幻灯機」、「映写技師」、「劇中劇」といった語彙は、孤立する自分の姿をさらにもう一人の自分がフラインダー越しに覗いているかのようなDUREIの歌にいかにもふさわしく、それ自体がすでに曲折した内面のドラマを暗示している。そうした曲折は、たとえば次の歌にもあらわれている。

坂道の途中がいまだ描かれず 空白に落ちるひとびと

こうした歌は様々な解釈が可能だろうが、歌の眼目が下句の「空白に落ちるひとびと」にあるのではなく、坂道のつづきを描きえないという上句にあることを見逃してはならない。坂道の人々が往来しているというわれわれにとって日常的な自明性を、なぜか貫徹することのできない作者の心象が、一枚の画布を前に鮮やかに定着されていて、歌には直接登場しない「われ」が、じつさいには空白を抱え込んでいることがおのずと理解されるのである。

*

こうしてみると、「全世界を異郷と思う」ことが、ほんとうに「完璧な人間である」ことなのかどうか、どうもはつきりとしなくなってくる。DUREIの歌は、少なくともごく普通の意味でいう幸福や安逸からはひどく距たっているように見える。宗教も倫理も哲学も、人間の全存在を包摂しようとするものだが、しかし事実としての人間はそのいずれのカテゴリーからみだす余剰を生み出すもので、あるいはそこに詩の契機が潜んでいるということかもしれない。じじつ次のような歌はその契機をとらえたものと言うことができるだろう。

ふいに襟がゆれる たったいま閉じた心から風が吹くのだ
頬熱くかぜのなかにて立ち止まる だれかがぼくを呼んでいるなら

異郷のなかをさまよいながらも、そこにはある秘められた約束が、自分のことを待ちわびている見知らぬ何者かの予感が、聞こえないはずの未知の呼びかけが、至るところ破片のように散りばめられている。しかし、それらは未完成であることを宿命づけられており、そういう意味で、DURENの歌は、逆説的にも危機や決定的な瞬間の回避という面もあるかとおもう。引用から始めたので、最後にふたたび、こんどはバフチンの言葉を引いておこう。《人間は生きていくかぎり、自分がいまだ完結していないこと、いまだ自分の最後の言葉をいいおわっていないことを生の糧としているのである》。

みどりいろの窓 明るくなるころの潮時をまだ知らない

約束が果たされることはないだろう。出会いが訪れることはないだろう。呼びかけた声が聞き届けられることはないだろう。みどりいろの窓はすでに光りに満ち溢れているかもしれないが、それを知ることはないだろう。

*

秦多めぐみ

未知の人、秦多めぐみ。わたしは彼女のプロフィールはなにも知らず、わずか十数首の短歌を読んだにすぎない。しかし、わたしが彼女のことを「未知」と呼ぶのは、なにもそうした情報の少なさのせいばかりではない。統一的な作者像を結ぶための手掛かりが彼女の作品には極端に欠けており、その作為性にはなにかしらの意図が込められているのではないかと疑いを持

ちたくなるほどである。

一読してわかる通り、彼女の作品は一首ごとに異なったスタイルを持っている。さまざまな人称、また文語・口語調を使い分け、さらには取り扱う題材や歌いぶりも多彩である。一般にこうした現象は他人の影響を受けやすい習作時によく見受けられるものだが、秦多の場合、どの作品も一定の完成度を示しており、なかには秀歌とよびたいものもあって、彼女の實力がすでにそうした模倣の段階にないことは明らかである。こうした多様性は、どうも彼女が歌を発動させるその心理過程に秘密が隠されているようである。

ついで見過ごすことができないのは、彼女の作品がどれも一首完結の意識が強いという点である。一首完結というのはいつけん当たり前のことのようにだが、短詩型のばあい、字数の制約から一首に盛り込める情報量が限られているという事情があり、これまでもいわゆる「短歌滅亡論」によって再三そこに形式上の欠陥があることが指摘され、いつぼうでそうした不備を補完するために詞書や連作が発生してきたという経緯がある。秦多は構図の切り取り方に工夫があり、また詩的イメージをあえて縮減することによって、どの歌も前後の文脈に依存せずに鑑賞できるようたくみに処理をほどこしている。

たまさかの光りのなかを鯨泳ぐ　いつかのように泣いてみたいよ

上下句を極端に飛躍・断絶させたうえで暴力的に結合させる、いわゆる「前衛短歌」で濫用された手法の歌である。こうした歌に接すると読者は日常・散文的な意識の再編成を強制的にうながされることになるが、かつてのシュルレアリスムの実験で示されたとおり、そうした言葉や観念の暴力的な結合が、それだけで詩を発生させるわけではない。そこに詩的興奮をおぼえるか、ストレスを感じただけで終わるか、その分岐に作品のいわば生命線があるといえるわけだが、秦多の作品は上句の創意が卓抜で、それが一首全体の価値を高めている。鈴木日出夫は古代和歌に見られる、上句に情景（や序詞）を提示し下句に類型的な心意を詠むといったパターンを「心物対応構造」と名づけているが、上記の秦多の歌はあるいはそうした古代和歌の変奏と読むこともできるかもしれない。

なお注意したいのは、こうした作品の〈意味〉を担保するのは、権利上作者である秦多の心理であるかもしれないが、われ

われはそこに拘泥する必要はないということで、作品の〈意味〉というのは読者はむろん作者にとっても、つねに作品が完成してから事後的に発見されるものにすぎない。いつけんエゴセントリックな歌ではあるが、その内向的な見た目とは違い解釈は外にむかって開かれているのである。

*

さまざまなスタイルを駆使しながらも、秦多の作品にはきびしい孤絶感といったものが基調となっており、その作品世界の内部では、他者に対しても自然に対しても intimate な交感は一切拒まれている。「母」や「友」が歌われていても、それはあらかじめ失われており、すでに不可能になったものとして現象している。不可能なものへの呼びかけであるがゆえに、呼びかけた声そのまま自分に向かって跳ね返ってくるという、出口のない悲痛なこだまがどの歌にも響いている。

夜の蛇 わたしの首を絞めに来る 殺意を超えたやさしさなどと

ないがしろの花ばかりがわたしの手のなかで凋れている

健康人の感覚から見ると、これは明らかに病的な妄想である。しかし、その表裏にある純潔への志向の危うさが、妖しい歌の魅力にまで昇華されていることは否定できない。

*

他者が不在であることから、必然的に秦多の作品は自己を劇化しようとする傾向を強く持つ。ただし自己劇化というのは自己陶醉とは違い、後者が周囲にたいし盲目になるのに対して、前者はそうした熱度から極端に醒めている。さきに述べた構図の巧みさと関係していると思われるが、秦多の場合、どの作品もパースペクティブを見失うことがない。自己と周囲の距離感

が正確に計算されていて、いわば装置と演出が整った劇のような趣がある。こうして秦多の作品はおのずと演技性を帯びてくることになる。

崩れながら母を呼びいて土に伏す 永訣ばかり頭蓋にありて

となると、さすがに演技過剰で、そのぶん迫真性は薄いといわざるをえないが、個別の作品の出来はどうであれ、そうした彼女の演技性が短歌という形式と不可分であることはまず間違いないささうである。形式の不自然さが演技の自然さを保証している。定型という形式の制約が自己発見の契機になっているというのは、見様によつては矛盾しているようではあるけれど、ひとは不自由を通じてはじめて自由になれるという、秦多の短歌はそのささやかな実例のひとつと言つていいだろう。

*

ここまでわたしは秦多の短歌を自己劇化・他者不在という仮定で読み、プロファイリングを試みてきたわけだが、「演技性」を軸にしていつのまにかそうした仮定が反転してしまったようである。知らぬうちに秦多の「われ」は、imaginaryな空虚となり、未詳の他者である「われ」がその空虚を補填する。こうした事情は《無私に近づくほど多くの読者の自発性になりうる》という寺山修司の言葉を思い出させるが、歌人と演劇人が同居していた寺山の存在が示すように、このふたつのジャンルにはなにか相通じるものがあるということだろうか。

未知の人、秦多めぐみ。あなたはだれか。それはあるいはわれわれだけでなく、秦多自身でさえその存在はいまなお謎のままであるのかもしれない。

*

中田満帆歌集『星蝕詠嘆集』Eclipse Arioso』(a missing person's press, 2019)

この歌集の跋文で中田満帆は《ここに収めたのは'04年から'19年までの歌より撰んだものである。短歌はそれまで詠んだことなど、国語の授業を除いてなかった。それが'04年の春に突如つくりはじめた。寺山修司『田園に死す』を読み、わたしは母殺しならぬ父殺しを書き撲った》とみずからの来歴を述べている。

寺山修司の影響は、歌の着想や語彙（犬・猫・鳥などの小動物、「少年」、「少女」の取り扱い方などもここに含める）のよきな表層的な面にかぎらず、作中人物をキャラクター化し背後に物語的世界を暗示させるという構成上の手法まで、きわめて広範に及んでいるようである。

亡命の猫いっぴきに餌をやり詩行ふたびわれに息づく

うちなる野を駆けて帰らん夏の陽に照らさるるただ恋しいものら

いくばくを生きんかひとり抗いて風の壁蹴るかもめの質問

姉たちの行方も知らず図書館で由一の鮭眺める時間

法医学教授するひと人体のなかに眠れる口唇期かな

青年のゆえ知らぬ悲しみとこころのあわたしきは、この歌集に収められたどの作品にも通底しているが、表現された敗北や挫折感に伴いがちな「甘美さ」というものはあまり見受けられない。それはおそらく作者が「われ」に固着しているからにちがいない。固着の度合いが強まれば強まるほど歌の色調は暗色に淀んでいく。心情の色合いは基本的にネガティブであり、肯定性というか、向日性というか、青春につきものの青空のきらめきはきれいに拭い取られている。これはすなわち作者自身の青春の欠如に由来するのだろうか。

そういう意味では中田満帆は、自伝的要素の強い「告白型」の歌人に分類してよいかと思うが、それがもつとも「告白型」から遠い寺山修司から出発したというのは、考えてみれば意外なようで、しかし、いかにもありそうなことのようにも思えて

くるから不思議である。

*

寺山修司は塚本邦雄論のなかでつぎのように書いている。

《多くの歌人たちに好んで扱われる素材は「そうであった自分」について、である。彼らにとって「なにをしたかったか」が問題ではなく、「なにをしたか」が問題なのである。短歌形式がつねに自省をともなつた事実信仰を前提にしていたのは「そうであった自分」の呪縛からのがれられなかつたからだと言つてもいいだろう。だが「そうであった自分」を誇らしげに語るのは行動者の特権か、被害者の哀訴のどちらかであり得ない》。

唇^{くち}を噤^む——きみのためにできるのはそれだけと識るこの夏祭

素裸のれいなおもしろ少年のわれは両手に布ひるがえす

やめてくれ——ぼくをなぐさめようとしてゆうこ求める脳^{なまね}の變^まよ

ほかにも類歌はいくつもあるだろうが、こうして並べてみると、ここにあるのは寺山の言う事実信仰というよりも、芸術意識によって変奏された原体験と言つた方がよく、「そうであった自分」に回歸するのは、特権でも哀訴でもなく、あんがい芸術家特有の戦術のひとつではないかと穿つた見方もしてみたくなる。とはいえ、これらはたんなる過去の再認ではなく、あくまで現在を解放するために歌われるべきものだから、追憶の sentiment が混入しすぎるとそのぶんだけ歌が貧血化してしまうものであり、中田の作品がその危険のすべてを免れているとは言い切れないのはたしかなようである。

*

さいきん、とある人文系の本のなかで、宗教分析のための作業仮説として人間の生を①外的自然への態度②運命への態度③周囲の人間世界への態度、その三つの圏域に分けてあるものを読んだ。これを短歌に転用すると、①は花鳥風月にかぎらず都市生活のなかにも潜んでいる外景との感応、②には老いや病も含めた実存的な領域の広がり、③には相聞・挽歌といった一大ジャンルに加え、オケーショナルな社会批判もふくめてよいと思うが、こうした分類は、多くの部立で採用されているものと大差はないとしても、整理には都合がよい。

それに準じてこの歌集を読んでいくと、①に関しては、登場する情景のどれもがうらぶれて脱色されており、すなわち作者の心象風景ということになるのだろうか、それゆえ実景ではなくあくまで構築されたものだと考えられる。どことなくどれもレトロな雰囲気をもとっているのは、それが作者の文学趣味に適っているためか、昭和期の映画を観ているような印象をうける。②は歌集の中心をなすが、あえてここでは省略し、③の作品をランダムに挙げてみると、

スローガン充ちたる町よ最愛のひとを殺せといつ叫ぶのか

終わりゆく枷や軛を愛おしむ幾千人の正しきひとびと

善良なライオンなれば翅生やし善良な詩人なれば腐れてゆくのみ

これらは一種の社会批判という風を読むことができるが、そのメッセージはかなり微温的である。むしろ読後にいちばん印象に残るのは、みずからは帰るべき社会を持たない作者の孤立した姿である。そもそも短歌形式がこうした批評性と相いれないという事情もあるかもしれないが、この鬱屈した鈍い熱度は作者がみずからの立ち位置を最初から社会と疎遠な場所に規定しているのが要因としては大きいように思われる。①から③までをまとめると、この歌集は一貫して現実との接点になにかしらの屈折をともなっている、という風になるかと思う。

さらにもうひとつ、系列をなしている歌がある。

どうかまたあのうそを吐いてくださいと告げるきみに取り憑かれ

ひとつでもいいからと云ってすがりつく火ぶくれた指の愛もある
なにもかも交換できてしまうからせめてあなたをうたぐっていたい

こうした歌は、意味内容がどうこうというよりも、あるひとつの気分・ムードを伝えるために歌われており、そしてそれ以外には読みようがない。すべてがライトな口語体で、言葉の運びに停滞が起きないように配慮されており、辞の流れに切れや断絶がないことよって、一首全体に充填されている情緒が保存・密閉されている。5W1Hが意図的に曖昧にされているため、意味のしこりを残さない。が、そのぶんどの歌も上滑りしているような感じもする。こうした作風はいずれなにかからの影響には違いないが、ぼくはその出所を疑っている。

*

ところで、これも跋文で《わたしはずっと短歌というジャンルに居心地のわるさを感じていた。それはメインじゃないと考
えながらつくっていた。わたしはいまも文語文法に疎いし、確信があつて歌を詠んでいるわけではないからだ》と書いている
とおり、どれも手探りのなかでつくられたという印象が強い。それはどのページにも散見される、破調による調べのぎこちな
さ、「てにをは」の混乱（これらはいずれも修辞の甘さに直結している）、またフェティッシュは漢字のあてかたなど、いかに
も独学者然とした歌い方で、その拙さとポエジーの魔術が不安定な均衡を示している、その成否は容易に判断できない。

ただ、ぼくが印をつけた作品（煩瑣になるので具体的に挙げるのはやめておくが）をあらためて子細に点検してみると、ど
うも短歌というより現代詩のマナーによつて書かれているという気がしてきて、もちろんそうした詩的レトリックを体得して
いるというのは天成の素質だといつてよいが、しかしながら、それが短歌という容れ物がうまくはまっていないうような、奇妙
な後味を残す歌が少なくない。異論はあるかもしれないが、《短歌》と《一行の詩》は別物だと考えた方が安全だろう。

*

ここでぼくは中田満帆の作品からつねにencourageされてきたことを書き留めておきたい。詩を投擲通信にたとえた話はよく知られているが、ぼくにとって中田満帆の作品は投石行為といったほうがいいほど、直截的にこちらの生身の感覚をマッサージしてくる。

短歌にかぎらず、ジャンル横断的な多才ぶりを発揮しているようだが、そうした興味は拡散が、仮にも周囲の理解や支持、あるいはよきmentorの不在によって惹き起こされたものではないことを祈るばかりである。しかし、かれの才能について、ここで香具師の口上めいたことを述べても仕方がないし、なおかつぼくはそうしたことに適任な人間ではない。いずれわれわれの時代が、その代償を支払わなければならない時が来るだろう。

牡蠣の身にすがりつくような愛をもってわれわれは檸檬の化身となりぬ
発つ霧へふいにマッチをかざしたるわれは猪圈いこくのひとかも知れず

こうした歌でさえけっして無償で詠んだわけではないのである。

*

甘ったれたヨハネたちへ

犬飼うろ子

塚本邦雄の作品集はどこを開いたとしても、圧倒的な華美を備えた、ともすれば熟れすぎて朽ちてしまうような言葉が実っている。しかしそれは人工的で貧弱な温室のなかではなく、しっかりと大地に根を張った大樹へたわわに生っている。塚本はこの根幹を養うのに十分な教養を蓄えていた。洋の東西を問わず、あらゆる文化を吸収した彼は、博物学的な巨匠としても迎えられていた。そんな彼がとりわけ取り組んだ相手がキリスト教である。

たとえば彼の歌集のなかでキリスト教的色彩がタイトルからして濃く出ているものは『約翰傳偽書』だ。約翰とはヨハネと読み、ここでいうヨハネとは『ヨハネによる福音書』を執筆した人物のことであろう。しかし塚本最後のこの序数歌集にはヨハネを詠った短歌は殆どなく、跋文に至ってはそのタイトルに「甘ったれたヨハネ、ゆるゑの偽書」という文句がつけられてしまっている。更にそこでは『マタイによる福音書』の冒頭に掲げられたイエス・キリストの系図の説明に紙幅の大部が割かれている始末なのだ。これは一体どうということなのか。

『マタイによる福音書』の冒頭は単なる膨大な人名の羅列のようであるが、実はこういふところも福音書記者の非凡があるものだ。まず系図というものは伝統と権威の表れである。だからそれに瑕疵をつけるような人物を基本的には付け加えない。ところがマタイはそうはしなかった。当時のユダヤ人に根深い男性中心の在り方を瓦解させてゆくように、マタイはその系図に五人の女性を忍ばせておいた。彼女たちについてはここで詳らかにしないが、しかし不倫などの不祥事に穢れていない者は少なくない。そんな系図の掉尾を飾るのがイエス・キリストである。マタイはイエス・キリストがどんな例外をも救い得る救世主であることを示すために、そんなことをやってのけた。

五人の女性たちは謂わば伝統に対する革新を象徴するものである。前者は言うに及ばず、後者にも光を射しこませる。けれども徒に新しいものばかりを撰取するという姿勢には批判が加えられる。ここで標的にされるのがヨハネである。ヨハネは福音書記者のなかでは開かれた人物で、彼の福音書には当時のギリシアの語彙や思想などがふんだんに盛り込まれている。それゆえこの書物はヘレニズムとヘブライズムの橋渡しとなる役目を果たしたが、そこから異端と腐敗の芽が萌し始めなかつたわけではない。彼はそれに抵抗した。にもかかわらず舶来品には種子がこびりついて離れはしなかつた。

塚本はそんなヨハネに対して「甘ったれ」と言い放ち容赦がない。節操のない新取の気性を跳ね除け、一方で自らの短歌は伝統に裏付けられた革新的なものであると主張する勢いである。『約翰傳偽書』とはそんなヨハネの態度に対する塚本

の最後のアンチテーゼなのではないか。そしてそんな塚本という革新を救うために歌誌『帆』がいま系図に書き加えられる。

内なる鬼を放つゝ《水野しず》をめぐって

うたたね 宥樹

*

もの憂げな目の彼女の唇が僕の耳に近づいたところで警戒すべきだったかもしれない。最果タヒはシンプルなナイフで切りつけてくる。でも傷痕は残さず、痛みだけは尾をひくように。ところが、彼女は名状し難い形状の朝星棍棒モーニングスターで殴りかかってくる。醜い傷痕が生涯消えないどころか、ひよつとすると傷口が塞がらないかも知れない。

これが《水野しず》の短歌との出遭いの印象だ。自身を「総合エンターテイメント施設」と呼ぶ水野は、'88年生まれ、武蔵野美術大学中退。女の子らしさという固定概念にとらわれず、一人ひとりの個性に目を向けた新しいアイドルオーディションを標榜する「MissiD」で15年のグランプリを獲得。以後、自分にとってのアイドルだと話す蛭子能収の影響が感じられるクセの強いイラストや、潔い諦めの境地にも安住できない違和感を冷静な筆致で綴る文筆などで注目を集めている。安易なカテゴライズを拒む強い存在感を放つクリエイターだ。

彼女は歌人・笹公人とコラボレーションした歌集『念力恋愛』でイラストを担当した。歌集の発売を記念して、知的エンタ

メ雑誌「月刊ムー」の公式ウェブサイトを「ムーPlus」で行われた「オカルト短歌」企画の選者になった際、一方的に選評するのも偉そうだと自作の短歌を披露したことを機に、表現方法のひとつに《うた》を加えようとしている。昨年、『キネマ旬報』『ユリイカ』の執筆などへ活動を広げるアイドル／モデルのゆつきゆんとともに、自ら編集長の座につき、新たなカルチャーマガジン『imaginary』（夢眠舎を意味深長にも12月8日に刊行。創刊号に、奥ゆかしくも「※短歌」、「水野しず（の）※主観（による？）」と注釈がつけられた『友達の彼は最悪』と題する連作を発表した。オンナも大切にできない、ある種のオトコ、いちいち目に余る我慢ならなさ、悪いオトコに引っかけかかってばかりいる愛すべき友達（女子）の、呆れかえることも苦しい不条理な境遇を、ほとぼしることばのままに書き殴った慟哭にも似た45首詠である。

その一部を引用、整理して概観しよう。

サンリオを好きな素振りがバレている心の叫びのようなモテたさ

サコッシュは個人の自由と思うけどバレンシアガはその範囲外

バーガーキングに行きたがるなよ

アラブ系イケメンだけどなにもかもなにもかもだよSAGIの質感

殴らないことを偉いと思ってる時点で殴る未来確定

友達は歯科矯正とかしてるのに彼氏ときたら服が泥沼

友達は会えば分かると言ってくる彼氏の方は会うのを拒む

金貸しはベニスの商人以来だよ本人たちが良いならそれで

鎌倉へ行った次の日鬱だった後は時間の問題だった

「無駄だった」その一言で我々は全てを察し熱海へ発った

営業をやっているからなんなんだやっているからこうなんだろうが

そうですね男性のことを端的に表すならばまあそれは、ありがた迷惑でしようかつまり

七色の龍と電撃入籍し全ての男に無視されたい

箱のピノ買って殴られた友達のアーモンド味をみんなで褒める

消費社会の残滓に浸かりきった男性に染みついた虚勢と暴力、愛欲という名の地獄に囚われた女性への深い落胆。最後に詠まれたアーモンド味のピノが示す圧倒的寂寥感は、水野の《内なる鬼》が鎮めるものもなく虚空に雲散霧消するところからくるのではないか。誰に伝えれば届くのかも判らない、そもそも端的な言葉にもし難い、世間に対する拭うことのできない違和感に焚きつけられた想いは、なにに託せられるだろう。彼女が短歌を選び取った秘密もこの点にありそうだ。

《ただ硯に向かひて、思ひあまるをりには、手習をのみたけきこととは書きつけ給ふ》『源氏物語』手習、9〜294頁、意識Ⅱ

ひたすら硯に向かい、(女君≡浮舟は)思いあふれる時には、(うたの)習作をばかり、自分を励ますこととしては書きつけなされる。

思えば《うた》は、とくに即興的なものは、《幽玄》や《有心》といった伝統的精神性を絶えることなく継承すること以上に、誰に聞かれるものでもなく、涙をこぼしながら、口を衝いて出る、想いの丈をブチまけることに原初があったはずだ。王権(天皇帝)の下、国の安寧を知らしめる神々(公家)の《あそび》である「うたわないうた」、日本語詩で謂う《和歌》が成立してからも、それは韻律という言語の内なる《呼吸》となつてつながっている。水野の詠んだ短歌は、描く出来事や、口語であること、その破調ぶりから歌壇から一段低く見られている「ライトヴァース短歌」とみられるだろうことは想像に難くない。だが、音楽ギークだと言われる水野だけに、その《呼吸》を忘れてはいないのは、朗読した場合のその語調の滑らかさからも間違いない。

短歌界限には明治期から短歌滅亡論というのがあるらしく、21世紀初頭にも、短歌のアイデンティティとはなにか、を問う5度目の再提起があったと聞く。哲学者のネルソン・グッドマンが、芸術とはなにか、つまりどのようなモノが(恒久的に)芸術作品であるか、は不適切な問い方で、芸術とはどのような場合に芸術となるのか、を問うべきだと唱えたのが'77年だ。僕たちはもういい加減、短歌はいつ・どこでどのように詠われる時、僕たちの胸に届くものとなるのか、をもっと強く想っていいのではないか。

これを深めるヒントは、中世から近世への境界にあって過去と未来をつないだ戦国武将・細川幽斎が、御所伝授につながる智仁親王への「古今伝授」を行った一方、蕉門に連なる松永貞徳を育てるなかで《あそび》がどのように展開していったのかという点に集約されていないか、と考えて調べを進めている、とまずは記して本稿を閉じたい。

*

邂逅とはかつての傷口をひとつこじ開ける簡単な作業

帆場蔵人

あれを出会いと呼ぶのかはわからないが、一先ずは出会いとしておこう。確か二年前の十一月だった。新型コロナウイルスが世界を一変させるほんの少し前、仕事を済ませて帰りの高速バスを待っていた時のことだ。その頃、私はお気に入り村上昭夫の詩集を持ち歩いては繰り返し読んでいた。一日中、話をした疲れもあり静かに過ごしたい、そう思いバスを待つ人の輪から離れて道端に座りこみ詩集を開いた。しかし、その場所も数分後には観光客やバスを待つ人々で埋め尽くされ、雑踏に取り込まれていた。

私は幼い頃から没頭すると独り言をいう癖がある。その日も詩を唱えるように呟いている自分に気づくまでかなりの間があった。とはいえ、そんな妙なものに関わりたくない人は少ない。通行人は気にも留めない。いや、留めないように避けていく。近くには同じ道の端に少し離れて座っている若い男女。赤いパーカーを着た女が私に背を向けて座り、連れらしき男に熱心に話しかけている。男の方は相槌を打っていたが、耳にイヤホンが見えて何処か上の空にみえた。聴こえていただろうか。

雑多な街の音、日本語と外国語が奇妙に溶け合っている。そのなかに私の呟きが混じっていく。ふと赤いパーカーの女がこちらを覗いていることに気がついた。パーカーと合わせたように赤く染めた髪。苦情なら謝るしかないなあ、と会釈する。女はウ、シ……？と呟いた。まさに今、『化石した牛』という詩を読んでいた。

「……ええと、詩です。村上昭夫という人の」

こんなこと言ってもわからないよな、と思いつながら話す。女は小首を傾げていたが、そのとき男が立ち上がった。バスが来ていた。私とは別の北に向かうバスだ。男の背中を追うように女もその場から消えた。

京都駅のバスターミナルで変なやつが詩を読んでいたり、そんな出会いとも言えないすれ違いがきっかけで詩歌を始める人がいたら少しばかり愉快だ。すれ違い、というとあまり良くない意味もあるがそればかりでない方が面白いのではないかという他愛もない話である。

余談

一旦、筆を置いてから些細な空想をした。あの女は本当に男の連れだったのか、と。男もバスの運転手も女にまったく目も向けずチケットのやり取りもしなかった。まさかみえて

いなかったのではないか。脳裏にはぎこちなく首を傾げる女の姿、記憶とは曖昧なもので振り返るたびに塗り替えられていく。ふと漏れた呟きに怪しいものが足を止めてこちらをみているかもしれない。……どうやら今、読んでいる『怪談短歌入門』に毒されたらしい。余談ではなく怪談が始まってしまった。

在りし日の頁を閉じてふりかえる そのたびに違う顔の女

作品雑感

井上橙子

中田満帆氏から、短歌への感想を、と言っていた。右も左もわからぬ世界で、ただ、自分の感覚のみ頼りに選んだ。今まで短歌に親しんでこなかった私が感想等とおこがましいとは分かっているが、独断で選ばせて頂いた。これは私の感想であり他の方が読めば浅い感想を、と嗤われるかもしれないが、素直な言葉で書いたものである。

OU-REI 『みどりいろの窓』より

眠れ我が亡霊 ゴレムとともに街をさまようなかれ

作者の心に亡霊のように棲みつく面影、街をゆく似通ったひとはニセモノであり、真理のなかの一字が消されれば崩れゆく泥人形のようなように儚く消えゆく、ましてそうであれ、との作者の願いであると感じた。

坂道の途中がいまだ描かれず 空白に落ちるひとびと

下り坂か上り坂か。未だ描かれない途中の道は作者の迷いなのだろうと思われる。その迷いゆえに作者の空白に落ちていくひとびとはどんな顔をしているのだろうか。

○奏多めぐみ『長い腕のなかのおとぎばなし』より

腕長き男のなかに抱かれてわたしのいまを葬り去りぬ

腕長き男、というのは異性をもちろん表しているのだろうが、ここで私は個人的な（例えば恋人や想い人）相手ではなく男性性として読んだ。男性性に触れることで作者自身の少女性から女性性への孵化を惜んでいるような喜びのようなジレンマを感じる。

わたしという一人称を切断する踏切あかず取り残されて

作者の「わたし」と言う「個」が世間の足並みや時間の流れなどという「踏切」に断ち切られ、結局、「自分自身」に追いつけないような錯覚を覚える。

○手塚雄呂血『星色の産毛』より

河を渡る、河を渡る、わずかひとつの願いの東京

作者の街は河を越えれば東京なのかもしれない。東京へ出たい、との思いのなかに、他者には知ることのできない複雑な心境があるのだろう。河を渡る、と二度つづけることで作者の東京への思いが強調されていると感じた。

ひとりだって寂しいとはおもわないだってきみのかげが
柘榴を孕んでいるのだから

柘榴＝人肉という比喻はここでは用いないが、柘榴＝胎児という発想はあまりにも飛躍し過ぎだろうか。孕む、という言葉も妊娠を連想させる。実際には受胎していないが、「孕む」は、「きみ」が思考することよりも更にその事柄の意味を強くする比喻なのだと感じた。それが作者の持つ孤独感を緩和したのだろうか。

○皆川健二『夢が断たれて』より

ひとめすら逢わぬひとこそおもいたる月の枯れゆく秋の
終わりに

月も枯れるように見える寂しげな夜だったのだろうと感じた。逢わないでおこうと決めた人がいたのか、それともネット上などで知り合った連絡だけの友人なのだろうか、その人の事を思う作者の心情は秋の終わりのように切なく、また、季節が変わるようにその心情の終わりを予感させるものだった。

玄人のカード捌きを見物す ハートのエース現るるまで

玄人と敢えて表現しているのが気になった。私はこの玄人は手品師だと感じた。作者はただカード捌きを見物しているのだけでなく、自分の運もそこに重ねて見ているのではないのだろうか。ハートのエースは占いでは「愛とか恋が成就していく。結婚や幸福をもたらしていく」とある。あえて占いではなく、手品師のカードに託しているかも知れないところがハートのエースというカードを効果的に見せていると思う。

○鷹枕可『蜜月関係』より

ひらがなのやみをひらかば三面鏡にあわくもくずほれる

ほどをうつしみ

ひらがなのやみ、とは漢字の闇と違い容易でやさしい感じがする。そんなやみにまぎれて三面鏡に己の身体をうつしてはぼんやりと老いを感じているのか、作者がお幾つか分らないが私にも身に覚えがあり、身に染みる。やみを「ひらく」と三面鏡、うつしみ（身と映し見）二重の意味が仕掛けてあるのか、楽しく読ませてもらった。

救済はことごとく死におとずれぬ生きてあらば衣擦れの音を立て

作者は「死」を、忌むものとは捉えていないようではあるが、望むと望まざるとは関わらず、そこには救いは訪れない、と距離を置いて見ている感じがする。もし生きていけば「衣擦れの音」を立てるほどの歩みではあるがなんらかの救いがある、と捉えているのではないかと感じた。なにかに苦悩した果ての発見だったのか。

砂時計ひとつぶの鉄をうづめてはかへらざる幾多後悔を閉づるに

捨てなければ砂時計はいつまでも手元にあつて、なんども砂時計をひっくり返しては時々、そこに数々の後悔を眺めてみているのだろう。延々とつづく自傷のようである。

○柳煙『(無題)』より

うすもれにちびたちあそぶうんめいはまわるまわせよこまのなかには

ひらがなの優しさのなかのリズムがいい。うすもれ、とは薄日が差し込んでいることのことか。そのなかで子供らがコマであそんでいるのだろう、コマもまわることもらの運命も回して、回る。作者はそれを眺めているのだろうか。

○きのゆきこまち『(無題)』より

浜跳ねる足はイルカのように 砂の飛沫も波に消えて風ぐ
浜

浜を駆ける元気な足、子供たちだろうか。イルカのようにしなやかで無垢で、それでいて獰猛。小さな海辺の獣たちは

視界を走り抜けていき、蹴られた砂も海に還りそこには波の音だけのこるのだろう。作者はそこになにも意味を求めずに純粹にそれだけを見ている感じがする。

人通り絶えた夜中の駅前を導くだけの外灯

夜中、誰もが家に帰る時刻。駅前と言えども寂れているのかそれとも、雪に追われて皆、いなくなつたのか。人がいる街を照らすのが仕事の外灯も、冬の手を引き寂しそうである。

○中田満帆『花を剪る』より

舟に棲む かぜにゆられて語ることすべてに水の匂いが
充ちて

舟に居を構えている。語ると言うことは誰かが共にいるのだろうか、それとも一人語りだろうか。水の匂いのなかに涙はあるか、寂しくもじわり温かみがある。

ライトヴァースは歌を見失った

中田満帆

競馬をやめてもう何年にもなる。「大阪競馬ストーリー」に金を払い、競馬予想システムとやらを使っていたが、当てたのは、最高で7千800円、あとは千円ほどのものだった。人間よりも馬のほうが美しく気高いが、いまでは馬を見るのも厭になっている。そして酒代のために小銭稼ぎの仕事をやって、どうにかこうにかじぶんを喰わせている。わたしはもうじき38歳で、もはや夢見る頃を過ぎたというのに、まだ夢を観ている。詩を書き、小説を書き、曲を書き、絵を描き、マス搔いているというわけだ。

いまだに俵万智のよさがわからない、穂村弘もそうだ、升野浩一も、そして木下龍也に至っては頭を抱えてしまう。小島なおは少し赦せるかも知れない。いまは手許に山田航編著の「桜前線開架宣言」という本があるが、捲っているだけで頭痛がしてしまふ。わたしの感性が劣っているのか、それとも時代遅れの塊りになってしまったのか。どれもこれもが質の悪い大喜利やキャッチコピーのように見えるばかりだ。体系的な短歌の読みがたぶん浅いのだろう。どうにも前衛短歌以後の世界がよく呑み込めていない。しかし、読めば読むほどにライトヴァースの歌人たちはみな、いまや歌を見失い、安楽椅子にかけてただ締めりのない代物をひりだしていようにしか見えない。たとえば以下の歌を、わたしは鑑賞に値しないとおもった。

白というよりもホワイト的な身のイカの握りが廻ってます（岡山大嗣）

木村拓哉は知っている顔に似ていると考えると結局それは木村拓哉なり（花山周子）

ジョギングのおじさん、ついに抒情するときです かなり發揮できます（笹井宏之）

重要と書かれた文字を写していく　なぜ重要かわからないまま（加藤千恵）

心臓と心のあいだにいるはつかねずみがおもしろいほどすぐ死ぬ（平岡直子）

吉野家の向かいの客が食べ終わりほぼ同じ客がその席につく（望月裕二郎）

たとえば火事の記憶　たとえば水仙の切り花　少し痩せたね君は（服部真理子）

右利きに矯正されたその右で母の遺骨を拾う日が来る（木下龍也）

致死量の愛、其れすなはち10ベクレル、もちろんわれも死に至るなり（藪内亮輔）

いえそれは、信号、それは蟹気楼、季節をこぼむ永久のまばたき（井上法子）

もう1年以上まえの話になるが、高校教師をしている歌人・千葉聡氏と「LINE」でやり合った。たまたま借りた歌集『海、悲歌、夏の雫など』を読んだ感想にかれが異議を呈したかたちだった。わたしは「高校生がつくったような幼い視点の歌、つたない韻律のつづく、ろくでもない本だ。'68年生まれ教師だという。教師は子供っぽい人間が多いが、かれもその例外ではない」と書き、かれは「中田さんの『教師は』以下のコメントはとんでもない偏見です。私は力不足ですが、世の中に、優れた教員はたくさんいます。また、高校生にも優れた表現者はたくさんいます」といい、さらにわたしは「わたしの学生観や学校観が歪んでいるのは否定できません。評判の悪い中学を経て、定時制に入った身分なので、学生時代というものに憧憬を見出すことはできないし、学生気分の延長線上にあるものを賛美して詠みあげる気にはなれません」と斬り棄てた。さらに「加えて『高校生にも優れた表現者はたくさん』いるのをわたしは否定しません。ただあの歌集にあるように最初から最後まで学

校のなかに留まりつづけ、外部に想像力を刺激しない世界は、わたしなら降りてしまおうだろうといことです」ともいった。あ
いもかわらず、ぶっきらぼうなことをいって、口を汚したが、次に挙げるような歌が氾濫している現状を鑑みると、なんだか
寒気がしてしまう。

一年生新入部員壁ぎわで「ファイトオ、ファイトオ、ファイトオ、ファイトオ」と言う

まだ膝の痛いナオキが踏ん張って打ったシュートに夕陽ひとすじ

部活顧問一覧 今年もバスケの二部顧問である千葉聡

バレーボール大会優勝 担任にハーゲンダッツおごらせる女子

「千葉君が歌人になって驚いた」そんな手紙に俺が驚いた

「千葉Qへ」手紙の最後に書いてある T田が俺につけたあだ名が

期末試験日 机を並べるのを手伝ってくれたカナ、ハナ、ミナは

授業中「先生、兄弟いますか」と訊かれた『斜陽』を語った折に

文化祭 四組のお化け屋敷内お化けのみんなに差し入れるジュース

文化祭人気投票第二位は一年四組「オワラナイ恐怖」

こういった歌をなんの気取りもなく、無邪気に詠んでいる、中高年の書き手の存在をおもうと、やはり退嬰的なものを感じてしまう。いつまで学生気分でのだ。ひとは歌のなかで若返ることもできるが、しかし、それは常に喪失からの逃避でしかないからだ。こういった一見すると、キャッチーに見える歌も、わたしのような人間からすると、「リア充」の戯れ言に過ぎないのである。つまらない学生時代をただただ甘美なものとして、やや冗談めかして詠われたこれらの短歌に、わたしは《苦しみ知らないものは存在とはいえない。せいぜいのところ、個体だ》というシオランの一節をおもい起こしてしまふ。かれの短歌には青春の軽さばかりで苦みも煩悶もなかった。とてもでもじゃないが、かれのいうように《学校よりも、そこに集う人たちを描きたく思います。いちばんは人》という意志は感じられなかった。いつまで学生たちと友達気分でのだろうか。もちろん、一口に学生時代といっても多種多様だろう。学生たちを見る眼だって多様だ。しかし、学生の優位性だけを切り取ったこれらの歌がどうしても響かないというのが、わたしの所感である。

なお、今回の歌誌に当たってはこうした方向の歌はできるだけ排除したつもりだ。「世界の再魔術化」を目論む歌を多く取り込んだつもりである。だが、本腰を入れてそれに取りかかるには人望に欠けているのは確かだった。じぶんの理想、それに加えて現実でのすり合わせ、せつかく寄稿してくださったひとびとへの感謝を忘れないことを念頭にしても、なんといえはいいのか、燃え殻ばかりが残ってしまった。もう少し明確なコンセプトが今後必要になるだろう。村木道彦や平井弘などの、謂わばライトヴァースの走りの歌人は好きになれる。しかし、かれらは歌を見失っていなかったし、短歌をただのみそひともじの定型文には終わらせなかったからこそ、良さがある。歌は定型に落とし込んだら終わりということはないのである。定型文と歌のちがいがわからない限りは、短歌という文学も文学を忘れ、詩を忘れ、ただの下手な冗談として墮落してしまうだけだろうと、わたしは考えている。まあ、文学的なオタワごとはもうやめよう。ずぶ濡れた犬ころのようにならないうちへの失望を笑い飛ばしたい。短歌？——それは肯定された。いまから大安亭市場にいき、鶏肉を買い、室にもどってスコッチをやるだけだった。かくしてニューウェイヴ、ライトヴァースは歌を見失った。

きみなら、どうする？

腐敗性政治的猥褻物 映画『絞殺』と天皇制について

下山陽造

*

たつたいま、聖なる辜丸を露出したまま、おれはモニターのまえでものを書く。最近はずっと映画と作劇の指南書を眺め、じぶんの至らなさをおもい知るだけだ。きのうは映画『絞殺』を観た。開成高校生殺人事件をネタにした新藤兼人作品だった。乙羽信子と西村晃主演。教育映画のような作風。会話・対話・発言の描写が非常にぎこちない。たとえば近所の連中（殿山泰司、草野大悟、初井言栄ほか）が科白をいう際、互いの発言が影響し合う、共振し合うところがなく、ただ準備された科白を順番に読んでいっただけにしか見えない。またほとんど無駄とっていい、裸体や、性描写が延々とつづき、うんざりさせられる。伏線の張り方も充分でない。実際の事件で、少年による暴力の動機づけが乏しいためか、フィクションで少年と少女の恋を挿入している。たぶん、近親相姦の場面も虚構だろう。クレジットを観て、やや驚いたのは少年少女がともに新人で、役名がそのまま芸名であったところだ。少年のほうはいまも現役の俳優らしい。多用されるスローモーション、そして時系列の入れ替え。正直、疲れる、かつたるい映画だった。新藤作品とは相性がよくないみたいだ。乙羽信子の息子の怒りに忍従しながら、それも過保護でお節な母性で以て、息子を包容しようとするさまはなんともいじましかつたし、息子が暴走して、仏壇を破壊するさまは、実際におれが仏壇を木椅子で破壊した27歳の夏の夜が懐おもいだされて、なんとも居心地がわるかった。

おれはほとんど母性を知らず、暴走する父権の十字砲火のなかで生きてきたから、父も母も信用に足る存在じゃなかった。もちろん、手厚い庇護のなかに鎮座し給う姉や妹たちも、そして自身すら信用には値いしなかった。なにしろ、酔っ払いの畜生で、酒のためなら、どんなに残忍な振る舞いも平気でやる男だったからだ。最近はずっと掌篇を書きながら、ロバート・マツキーの本を眺め、ダイアログとストーリーについてずっと験あやされてる。きょう投稿した掌篇はまったくウケなかった。正

直、なにをどうやればいいのかもわからない。またべつの映画を観ながら、物語るといふ行為について考えなくてはならないだろう。それはつねに自身の内なるパターンリズムを冒瀆し、破壊することだ。おれはおれに満足できない。まだまだ磔刑が必要なのだろう。室を暗くして他人のつくりあげた夢を上映することになる。まあ、そうはいつても、それは理想のうえで、現実では時間の空費が目立ってる。なにもしない。ただ空想に身を任せる時間の多さ。過去の失敗、未来への不安、俗事への関心にふりまわされ、大したこともできずに眠ってしまうことのほうが遙かに多い。いったい、なにをやってるんだ、おれは。

じぶんの身の振り方が、立ち位置が定まってないからこそ、あの映画に於ける決定論な生き死にに苛立ってしまう。最初からなにもかもが決まって、それにむかって突進する人物たち。あらかじめ決められた悲劇を進むことの愚かしさ、そしてひとつの美学さえ持たないという点に於いて、あの映画とネタモトの事件とは通底してるように見えてならない。ただかれらとおれを分かつものは家に対する態度にあるようにおもう。おれは早くからの家出主義者だったし、じぶんの内なる世界とともに、逃げることで生き延びてきた人種だからだ。家族というものを早いうちから見限ってしまったから、あんなことにはならず済んだといえる。おれは肉親たちがどこでどうしてるのかも知らない。結婚したとか、子供がいるとか、そんなこともだ。数年まえ、分籍届をだすときに家族の氏名と現住所の書いた書類を役人が持つて来た。でも、おれは見なかった。

教室にしろ、家庭にしろ、狭い、限られた空間のなかで多数が生きていくには限度がある。どんなやさしい動物だって狭いところでは共喰いや疎外が始まる。他者の領域を土足で踏み歩かない、自身も他者の領域を侵さないという、およそ最低限の流儀を保つことは容易いことじゃないということだ。もちろん、すべての人間におれみたいな逃げ道があるわけじゃない。人間性を破壊されるまで踏み荒らされるものもあれば、判断力を失って、ビルから飛び降りるやつだっている。だから、これは生存者の愚痴に過ぎない。ただいえるのは近親憎悪に陥るまえにその場所から、離れるべきだということだけだ。

*

時代と添い寝をするみたいなきことは書きたくない。本来なら、そういったことは避ける。でも、きょうみたいに空振り三振を繰り返した夜にはなにか、ひとつふたつ書いてみようという気分になる。これから書くことはぜんぶ、でたらめの戯れごと

でしかない。だから、もし街でおれを見かけても背後からスモモで襲撃したり、バナナを持って殺しに来るようなマネはやめて欲しい。もちろんのこと、パイナップルを満載した街宣車を寄越すのも論外だ。そうとも、おれはセルフ・ディフェンスについて語ってるんだ。

まあ、どうでもいい話だが、河野太郎が天皇帝に言及して非難を浴びてる。少なくともおれが見たのは非難ばかりだった。見る場所をまちがえたのかも知れないが、ともかくそんなことがあった。おれの天皇や皇室についての考えは、ほとんど井上達夫がいつてることとおなじ、というよりもそれに肯いただけとっていい。存在として否定しないが、制度として否定するという立ち場だ。いい加減に天皇という存在からの離乳が必要だろうし、皇室の人間に基本的人権を保証するべきだろう。おれは河野防衛相の発言に正直、なにも感じるところはないが、発言した当人しろ、それを非難するやつらにしろ、肯定するやつらにしろ、絶対的に欠けてるのはじぶんたちが語ってる対象が、血の通った、じぶんたちとおなじ人間たちであって、ブリーダーに繁殖される犬や猫ではないということだ。考えるのもおぞましい発言をおれは読んできた。正直、ゾツとするものが多かった。おいおい、おまえらは胸に手を置いて考えてみる、死ぬほどイカしてるぜ。側室だとか、代理母とか、クローンとか、おれには狂ってるとおもえない。おれは右にも左も立ってない。いいたいのは一定の例外は除いて、ひとには心や魂しいがあつて、そして感情やおもい、望みや夢があるということだ。天皇や皇族の話題におれが近寄りたくないのは、そういうものはじめから存在してないみたいに書く連中が蝗のようにいるからだ。あー、くそつ、おれはこうやってまたしても泥舟に乗って沈んでしまうんだ。だけど、おれは助けてくれとはいわないぜ。

天皇帝なんてものは明治以来のたかだが、150年ぐらいもので、それは近代化と欧米列強に対抗する、求心力のための、幣に過ぎなかったわけだ、そして近代が終わったいまとなって、そんなものに和合するのはいかにもばからしいことにしかおもえない。昭和が終わった時点で、国体としてのそれなんてものは幻想でしかない。いい方を変えれば、舞台装置に過ぎない天皇制を令和の時代になってまで、拍手するのは実に滑稽にしかおれには見えないのだ。祝賀会だったかで、中年男のアイドル・グループがばかげた歌を披露してたけど、あれでいい加減、眼を醒ましたやつもいるんじゃないか、天皇なんてもはや、ぺらぺらのお飾りでしかないことを。物語るといふ行為はそうした古びた偶像たちを葬ってしまうぐらいがちょうどいい。天皇制というパターンリズム、想像力によって内なる造反と破壊を昇華される行為、その軌跡こそが作劇の鍵におもえてならないんだ。

妄想狂？——そうかも知れない。なんとでもいえばいい。おれはこの遊戯をつづけるだろうし、世界はそんなことを気にしちやない。映画が、小説が、ただの学校道徳の射程内に収まってしまわないためにも、破壊と再生との往復運動が必要なんだ。寧丸を露出しながら、おれはこんなことを書いてる。室の鏡のなかで、まぬけなものを大まじめに書く男がいる。それがおれだ。きょうはちよつと、熱くなりすぎた。ちよつとだけ赦して欲しい。付言すると、愛知のアート・イベントで昭和天皇の写真を燃やした行為だとか、ただの誹謗におれは与しない。ただ戦前の瘋癲病院に存在した自称・天皇の葦原金次郎や、天皇にまつわるパロディ、風刺、諧謔の類いは赦されるべきだ。むしろ、天皇を細分化し、みなそれぞれ、おのれのうちなる「マイ・天皇」を携帯するくらいの余裕とユーモアが、いまの時代にあつて、ふさわしいのではないかとおもつてる。

ネットは所詮枕投げの世界だ。でも、そのとき枕の衝撃で死ぬ人間がいることを忘れるべきじゃない。おれだって、あんただってそうだ。エールの木箱をあげながら、口笛を吹いてるところへ、鉛のつまった枕が降って来るかも知れない。てめえが投げてるかも知れないんだぜ、つたく。

*

そういえば、曾我部恵一が「戦争反対音頭」という歌を発表した。おれはまだ聴いてないが、おれは戦争で死ぬまえに経済で死ぬほうが早いんじゃないかとおもつてる。もちろん、戦争には賛成しないが。映画のフィルムが終わって、場内に灯りがつく。その3分ぐらいで、事切れてるかも知れないんだ。——じゃあな。

*

短歌について、作品について、歌誌の印象について○参加者座談

司会／三浦果実、発言者／中田満帆、犬飼うろ子、きのゆきこまち、柳煙、花島大輔、うたたね 宥樹、lynx、追加コメント／朝、鷹枕可（以上、敬称略）

*

*

三浦果実 まず最初のトピックである《短歌とは》ということについてやっていきたいと思うんですけども。都合で欠席になっていきます、帛門さんの方から、この《短歌とは》についてコメントをいただいていますので、それを私のほうで代読させていただきます。

《短歌とは定型の呪いと仲良くやる詩だ》と思います。呪い、とは綿々としてきた作歌の制約だと思ってください。これまで短歌は様々な呪いから解

放され、また解放されようとしてきました。題材の呪い、私性の呪い、文語の呪い。これらは完全にあるいは部分的に解消されていると思います。そして今尚残るのが定型の呪いです。この呪いだけは決して解かれてはならないと考えています。この呪いとは仲良くやっていかねばなりません。ここで勘違いしてほしくないのは、字余りや字足らず、句跨りを否定しているわけではないということ。飽く迄、仲良くやる。定型はいい尽くすことを許してく

れない呪いですが、短歌を歌たらしめるものでもあります。短歌は定型と仲良くやる詩。逆にいえば、それ以外は美意識に基づいて自由にやるものだと思います。専ら私は恋の歌ばかりをつくってしまうのですが》。

この帛門さんのコメントに限らなくて結構ですので、短歌とはということについて意見がある方は是非よろしくお願いたします。

中田満帆 短歌とは、っていう主語が大きいんでね、ちょっと答えづらい問いかけではありますけど。短歌はなんというかひとつの陶醉。だから形式に酔ってつくってしまうっていう部分がいぶあつたと思うんですね。で、その陶醉せずに冷めて歌うためにはなにが必要かっていうと、やっぱり自分自身との距離感っていうか、そういうものを明確に掘り下げていくっていうか、そういう過程が必要かって思ってるんですよね。だから、自分自身が何者かっていうことを徹底的に批判を込めつつ、短歌という形式のなかで綴っていくっていうか、その批判をね、そういうものが、短歌にとって必要ではないのかなと思うんですね。ただ、その定型についてなんですけど、たとえば平井弘なんかの近年の作品なんか読むと、まったく自由律の短歌なんです。だから、そういうものも別に否定はしたくないし、あってもいいと思う。た

だ、自分が批判してるような、たとえばライトヴァースの最近の歌なんかにあるような、時代と寝てるっていうか、そういう感覚はどっかで切り捨てていかなないとやっていけないと思いますね。

犬飼うろ子 私との距離が大事だっていうことを中田さんが仰ったと思うんです。近すぎず遠すぎずとか、近づくべきだとか。いや、むしろ遠くすべきだってのは、それぞれだと思ってるんですけども。いまの時代とともに寝てるひとたちっていうのは、どういう距離感で私と向き合ってるのかなっていうのは、ここから掘り下げていたらおもしろくなるんじゃないかなと思ってます。

きのゆきこまち 自分というものを掘り下げるときに掘り下げるからこそ、形っていうのが大事なかなと思えます。ひとが生まれたときから社会のなかでいろんな教育だったり影響を受け

て、ああするべき、こうするべき、こういうことはしてはいけないという規範みたいなものを、しこたま身につけて大人になって自分というものができているので、大半の場合素直に自分をだしてるつもりでも、それって結局だれかの真似事というか社会というか、そのひとがいままで受け取ってきたものをそのままだしているに過ぎないわけ、そうやってくると最初にでてくる言葉っていうのは社会の言葉であって、そのひとの言葉ではないんだと思うんです。五・七・五・七・七の枠組みに自分のいいたいことを入れようとするときに、普通だったらそのまま入るはずがないので、それをどう枠のなかに埋めていくかを考えてるうちに、自分がぱっと思いつかなかった言葉がでてくる。社会にそういわされている思わされている幻の自分が消えて、本当の自分に出会える。本当の自分に出会えかけだからこそ、枠組みって

いうのは大事にしたほうがいいんじゃないかなとは思っています。

朝（追加コメント、短歌とは） 恐縮

ですが私はそもそも「短歌」に詳しくないため、私が詠む短歌を、私がどう感じているか、ということを書くことで短歌を語ってみます。また、世の中には実にいろいろな短歌があるので、それについて語ることもすみませんが、私にはむずかしそうです。私はたとえ短歌史を勉強したことがほぼありません。また、部屋に歌集はひとつもありません（ネットで活躍している歌人ではありません（ネットでは活躍している歌人で作風が好きなのはいます）。しかし、五・七・五・七・七という流れがとて也喜欢なので、「短歌を詠みたい」と直観したときには、おもむろにスマホを取りだして歌を書き出します。「詠みたい……：ような気がする……：」という中途半端な直観のときは、だいたい出来がよくないか途中で止めてしまいます。

古めかしい言い方をすれば、私は、そして私の短歌は、言うなれば巫女型なのかも知れません。私は短歌の歴史をあまり知ってはいませんが、そのような感覚が短歌の歴史や、創作における普遍的な感覚と繋がっているのだという安心感をもたらしているような気がします。ただ好きだからというだけではなく、なるべく、五・七・五・七・七という流れを約束として守りたくなること、あるいは「海」、「鳥」、「風」など、いつの時代にもある言葉が頻出することも、その影響なのかなと感じています。しかし、それはつまり職人型ではないということなので、詠めなるときはまるで詠めないし、そう気づいたらなるべく詠みません。ただ静かに待っていることが多いです。そんな折には、「ふたつよいこと、さてないものよ」という、私が尊敬するとあるひとの言葉を思いだしたりします。

鷹枕可（追加コメント、短歌とは）
短歌とは、淋しき流氓の望郷より洩れいずる、ひとたびを綴る絶唱です。

花島大輔 僕はわりとあっさり「短歌とは」っていったら、辞書にあるような定義だけで充分かなと思ってるんです。で、その文語とか私性とか題材とかは、結局個別の歌を見ていく以外にはないので、「短歌とは」ってなったときに、最終的に読む人間としてなにを求めるといったら、定型ってことになると思うんですね。たとえば一行詩ってありますが、そういうのははっきり別物だと思えます、短歌っていうのは。また読む側からだけでなく、作る側からしても、いま、たとえば自分を掘り下げるって話がありましたが、石川啄木とか読んでも短歌はすごい自由な感じがするんですけど、これが詩になるとすごい不自由な感じがするんです、約束や制約がある

ことがかえって自己発見の契機になっているというか、定型ということには、そういった面もあるんじゃないかと思えます。

柳煙 自由詩でも短歌でも推敲って言葉があつて、自分でつくった文章をいじることになると思うんですけども、それは自分自身を偽ることになるのではないかなとも思いましたね。

うたたね 宥樹 いま、いろいろできてるんですが、たとえば中田さん、あるいはきのゆきさんが自分自身や社会というようなものとの距離というか、そのあいだみたいなのところに短歌が立ち現れてくるみたいなのをいわはったように思うんですけど。ちょうど僕が寄稿した文章も、ちよつとそういうようなところに問題意識を持っていて。だから僕は、この短歌とは、っていうのが問い方として違和感がありました。

なんていうんでしょね、短歌の本質みたいなのがあるというよりは、その時代時代とか状況状況かな、あるいはだれかとだれかみたいなののであいで起こって来る、生まれて来るものが、短歌というものののかな、と僕はつねづね思っています。それゆえ、いわゆる定型というのをなにかこう、ある種の枠組みのように思うと、それはまた少しちがうのかな、というふうに感じるところがあります。

ryinx 社会の言葉、この言葉、言葉を探す、言葉がでて来る、掘り下げる。いろいろ意見ありましたけど個人的にわからないなりに思うのは制約ですよね。五・七・五・七・七っていう制約が仮に絵画のキャンバスであるとする、非常に圧縮されたキャンバスなんです。空間が圧縮されてる。だから、そこから飛びだそう、飛びだそうっていうふうになるんじゃないかなとか。

あとは、落ち着いて流れを緩めずにいこうっていうふうになるとか。そういったフレームがあることによって、それにどう対応するかっていう選択が求められるような気がします。だから、その何色でも使っていていいよっていうのであればあれだけど、たとえばこの色のこの色とこの色と、あと濃淡だけしか使ってはいけないっていう、そのフレーム、枠組みですね。それがあつたそのなかで、じゃあ、どういうふうにしようかなっていう、模索が生まれるような気がします。

三浦 中田さん、最後この話題まとめていただく一言が欲しいです。

中田 まずひとつ、短歌についてなんですけど。確かに自分を掘り下げるからこそ定型が大事とか。辞書にある定義だけでも充分だとか。それもわかるんですけど、ただ厳密にそのいま自分

が求めている短歌っていうのは結局は私性っていうか、そういうものを超えたなんていうかね、ある種、「世界の再魔術化」みたいな、そういうものを狙っていききたいなと思ってますね。

きのゆき 流れ上、いいづらかったんですけれど、私にとって短歌って歌なんです。歌っていうのは音とリズムがあって。で、歌うためには口が必要で、歌おうとするとまず唇だったり、喉だったり最初の音をだすための準備をし始める。そこからがもう歌で。肉性が私にとっては大事なかっていうのがありまして。定型にちゃんとはまってるない歌を私が読むと、なんかすごい音痴な歌を聞いたような気持ちの悪さをすごい感じてしまうんです。それだけみなさん音をイメージしてないんだなっていうのを最近よく思います。

中田 そうですね。確かに音読すると

きに歯切れの悪さがないようにっていうのは、やっぱり心がけますね。たとえばその破調であっても。たとえば私の歌でいうと、

石を探す石を探す石を探さりとて埒もない河原の真午

破調であつてもリズムっていうのはやっぱり必要だと思うし、それで滑らかに歌えるならいいなと思うんですけどね。ただ、さっきもだしたように平井弘みみたいな自由律みたいな歌も私は好きなんです。だから、そういうものもちよつと肯定したいっていう感じですね。

柳煙 (音について) 私は基本、喋りたくないんで大事にしてないと思います。

うたたね えっと、大事にしてないっていうのは柳煙さん、あれですか、あまり考えに入れてないっていうことで

すか。もしくは、それを否定するみたいな格好ですか。

柳煙 音自体は大切だと思うんですけど、口にするっていうのは想定してないですね。

うたたね 先にきのゆきさんもいうてはったように短歌もですけど、僕なんかの詠む俳句もそうですし、あとはいわゆる「POP」とかの歌、とくにラップですよ、やっぱりリズムや口に出しているたときにどうかっていうのは重要だと思います。なにか形式みたいなものというよりは身体性のほうが、僕はどちらかというところ大事だっていうふうに考えている口ですね。なので、柳煙さんがいわはるんは、どういうニュアンスなんかなって点は、もう少し聞きたい気がします。

三浦 そもそも五・七・五・七・七つ

てというのが韻というカリズムになると、音になっていくっていうふうには僕は思うんですけど。そのへんも含めて花島さんどうですか。

花島 いや、僕もあんまり考えないですね、音っていうのは。いまは普通に句切れとか句跨りとか珍しくないし、指折り数えてみないと三十一文字かわからないような歌もあるので、結局は一首読んだときの感じっていうか、ニユアンスっていうか、ひとつの塊として違和感なく受け取れば、そこまで気にしないうすかね。そもそも短歌にかぎらず、詩でもそうだけど、その音楽性というのは限定的なものだと思っ

ていて、実際音楽的に陶醉できるような作品に出会ったこともないですしね。
犬飼 三十一文字についてなんですけども。とても主観的な感じかも知れませんが、これに当て嵌めてさえし

とけば、自分の意見を表明できる、ステートメントみたいなものを打ちだすような短歌っていうのは目にすることが多いと思いますね。ほんとにそれをすべきかどうかっていうのはちょっとよくわからないんですけど。たとえば私を語る語らないってことで、奏多めぐみさんの、

わらの犬——燃えあぐるとき人心の脆さをおもうことと告げたり

という短歌があるんですね。で、わらの犬っていうてるんですけども、とても馴染みのないことやと思うんですよ。わらの犬っていうのは古代の中国でお祭りのときに使われていて、でも、お祭りのとき以外は燃やされて捨てられてしまうってものなんです。こういうことを引用してまで、さて私のことを伝えたいかというとは僕は難しいと思うんですけど。そうするとこのひと

は本当になにをしたいかってわからないんですけども。でも、不自由の自由みたいな話、でてましたけど、三十一文字があるからこそ伝えられるとか、そういう制限があるからこそ伝えられるっていうのがあったと思うんですけども。なんか引用してくるとか、ほかのものから取ってきてそれを題材にして他のひとに歌ってもらってこそ、初めて私が歌われるっていうのも、すごい見ていきたいところなんですけどね。三十一文字っていうのは単なる制限ではなくてひとに読んでもらって伝えられていくための解放でもあって、口から口から伝わっていくことを考えると、それこそ一人では収まりきらな

いとところがあると思います。だから、つくる側だけじゃなくて、読む側の私

の含まれてるのが短歌やと思いませんね。

rynx いまの犬飼さんの繋がっていく

っていうお話を伺いまして、そのまえに僕が考えていたのが世界の世ですね、それに対して私がいるみたいな構造を

考えてたんですよ。世界のなかに相対する私がいって、いろんな感情を味わったり、いろんな思いをしたりしてきているっていう情景をメモ帳に図式化してたんですよ。それで、それをひとに伝えるにはまずフレームがどうしても必要で。フレームであったりリズムであったりとか。それで犬飼さんの意見を聞いて共有って意味合いもあったのかなってちょっと思いました。共有です。自分が走ってるだけだったら個は個のままなんですけれども、それが共有されることによってなにか振幅していくような、脈動していくようなものもあるのかなっていうふうに感じました。

三浦 ありがとうございます。いまちよつとまた新たなトピックもでてきた

かなと思うんですよ。共有ってそんなに大事かなっていう。うたたねさんお願いします。

うたたね 実は僕が自由律俳句でやっていることも若干絡んでくるんですけども。共有っていうのは、パソコンのファイル形式つてありますよね、HTMLやPDF、画像ファイルならJPEGやGIFなど、あるいは（携帯電話の）通信規格、たとえばいまだったらなんですか、5Gとかですか、そういうものがあります。それらつて結局デジタルなものというか、こう細かな何かまで伝えようとするときでも、すべてできるかぎり、切り飛ばすものですよ。俳句だと、やっぱり有季定型というところで、必ず季節を読み込みましょうねつてところまでフォーマットにしちゃったりしてるわけです。それはそういう流派というものはあるにしても、あるとき、それを超えてというか、そ

れとは関係ないところのものを詠む場合、実はそっちに引つ張られて詠むことができないなんてこともやっぱ起きて来るんです。これは（文学以外の）

もっと細かなところだと、哲学や科学の言葉でもそういう限界にぶち当たることがあり、そこを乗り越えるのはどうしたらいいんだろうかっていうところから、20世紀に現象学であるとか、言語哲学がトピックとしてあがってきたのだと僕は考えていて。そういうものですら捉えられないようなものに対して、詩であるとか、短歌が求められているところがあるんでしょうけれど、そんなときに共有というのは僕は逆行してるかなっていう気がしています。

三浦 いまのトピックは私的にはちよつとおもしろいと思っております。というのも中田さんが冒頭にいった、その時代と寝ないっていう、時代と寝ないというそのことに共有するしない

っていうこととも、なんかすぐく関連してきているなと思っていて。これについては、きのゆきさん、花島さん。ほかの方にもお聞きしたいんですけど、まず中田さん、いきましようか。

中田 自分の知性では及ばないところもだいぶあるんですけど。自分の場合もともと『新アララギ』っていうところで投稿してまして。添削を受けていたんですけど。確かにそこで上達したことは確かなんですけど。ただそこはやっぱり写生一筋っていう。そういう流派なんです。だから、それを超えてしまおうとアウトになってしまおうっていうか。たとえば、自分が短歌という形式のなかで物語を読もうとか、別の世界について歌ってみようと思ったら、やっぱりアウトになってしまおうんですね。そこでは厳しくいわれてしまおうと。で、そういうところで写生から外れないものだけを掬い取って並べるっていうこ

と。もうひとつはですね、選者のひとの添削をです、無理やり添削案を押しつけてしまうっていうところがあって厭になって飛びだしたんですけど。そういう狭量で支配的な場所ではなく、もっと自由のある場所で、自分としては短歌でその物語や別の世界について歌いたいなと思っています。それが時代と寝ず、時代を超えて共有できるものをつくる土壌になればとおもいます。

三浦 花島さん、この共有の定義にも因るんですけども、これについてはどうですか。

花島 いまの感じの流れだと結構定型を脱出していくっていう感じの流れになってるんですけど、実際のところ僕は今回いろいろ読んだりとかしたんですけど。昔、ちょっと短歌読んだときにたとえば葛原妙子とか好きで、今回、

読み直してみたんですけど結構読んでだいぶストレスを感じるっていうか、破調とかが多いと読む側からすると僕はわりと定型のほうがいいかなと思ってるんですね。共有っていうのも別にいまの人間だけじゃないんで。共有する人間は過去の人間もいれば未来の人間もいるわけで。だから、別にいま現在の自分だけ押すっていうのは、まだ僕は共有はすごい大事だと思ってるんですけどね。いまの感じだとあんまり否定的な感じなのかなと思っただんですけど。今回、いろいろ原稿書くにあたって『文学界』の短歌特集を読んだんですけど。近所の図書館があまりなくて、そこでもなんか短歌コーナーがあつて、SNS時代だからっていう、なんか語り口で載ってたんですけど。たとえば俳句と短歌って比べたときに俳句よりも短歌の方が自分の主体性っていうのがでるわけで、短歌って主体性があるんじゃないので、そういうSNS

Sで流行っているっていうのは、わりとみんな自己アピールしたいのかなっていう、そういう面から短歌に需要が高まって来てるのかなと思うんですね。そうやって来るとみんな自分の思うことだけいっていて、全然共有の場がなくなってしまうって、結局短歌にこだわる必要ってのはもうなくなってしまわないで。たとえ別にその初めから、短歌じゃない一行の詩を書けばいいだけで。短歌を書く以上は共有っていうのは過去の古典の作品もあれば、今後未来にも繋げていくっていうのもあるので、一概に共有を否定するのはどうかなど。

ryinx 僕のなかで先にいった共有っていうのは、共有していいこうっていう意味合いでの共有ではないんですね。フレームを五・七・五・七・七、字余りとかあってもフレームがあるっていうこと。世界と私っていうのを考えてい

たんですが、もう一つ別のそれが縦のベクトルであるとする横にもうひとつ線が引けて、他者ですね、ほかにも私がたくさんいて、そこに共有しえないけれども、もしかしたらギリギリ伝達しうるんじゃないかっていう。私の個々の私のなかに筆者のなかにある感覚を、っていう意味合いもあったんですね。

きのゆき 私のを考えて短歌をつくってるかっていうことをベースにして話すと、世界っていうものがあって、それをいろんなひとがいろんな捉え方で見ていて大多数の見方は一緒だけど、こういう見方したら、おもしろいんじゃないっていう瞬間のおもしろい部分だけ切り取ってる感じなんです。おもしろさは大体日本語が使って日本人として普通の範囲の価値観を持ってたら理解可能な範囲というか。私のなかで世界がそうである価値、別の価値

みたいなものがあって。そこは別に共有しなくていいなと思うんです。歌ができたきっかけがどういう経験だったかは読むひとにとってはどうでもいいので。だから、百パーセントの共有でもなければ百パーセントの私のためだけのものでもない、美味しいところはシェアしつつ、自分にとってだけ美味しい分もありつつっていう二重性を意識はしてますね。一人の人間がたくさん歌を詠んでいくうちに私らしいなっていう範囲から、普段の私らしくない範囲まで。光の粒子と波の性質みたいな感じでどっちも含まれてて、含まれてるものだし、含まれてていいんじゃないかなとは思いますが。

うたたね ryinxさんの話を聞いていて、それはどちらかというと共有ではなく同期なのではないかという気はしました。で、そのちがいはといわれるとなかなか話しにくいなところ

はあるんですけれども、どうでしょう。

tyinx 自分のなかに最初にあった図式
ってのが世界のなかにぼつんという私。
話を聞いてるうちにその私がたくさん
いるってイメージで。気分の共有って
いうのがされているかのようなことが
トピックにあがったと思うんですけど
ども、個人的に自分がSNS見てるか
ぎりではどれだけシェアしても、どれ
だけ伝えようとし、どれだけなにかぼ
んってあげたとしても、それは閉じて
ると思います。閉じてるっていうのは
ちょうど短歌の始まりと終わりがあ
るように。それはちょっとちがうか。た
えばSNSでは共有されているかの
ごとき振る舞いがあるけれども、実際
本当に今のところどうなのかっていう
と、共有ってなんだろうって思ったと
きに、ほんとにその相手の話をいま現
在ひとは聞いているかなって。自分とし
てはどちらかっていうと残されたもの

であるとか、その創作物。たとえば最
近読んでる啄木であるとかにしても、
残ればふと眼に留まって、その世界に
私が吸い込まれていくような感覚にな
るようなこともあると思うんですね。

三浦 このあと中田さんにまとめい
てもらおうかなと思うんですけどもね。
先ほどのきのゆきさんの仰ったこと
っていうのはすごく印象に残っていて。
つまり、おもしろくてイージーな簡単
に受け入れられて共有されがちなん
けども難しいもので、過去・未来・現
在があって、いま、すぐ受け入れら
れない、難しいものであっても、未来
はそうじゃないんじゃないかとか。あ
るいは過去に難しいものが、いまは共
有されたりとかっていうようなことが
時代と寝る寝ない話かなっていうふう
にも思うんですけど、中田さん、どう
ぞお願いします。

中田 結局、その同時代の人間に期待
しちゃダメだってことなんですよね。
これからさきに生まれてくるひとたち
が読んで共感できるものを、受け入れ
られるものを書いていくっていう。そ
ういう対処方法しかないと思うん
ね。結局それは生きていくってことだ
と思うし、創作をつづけていくための
そのなんていうか、動機のひとつには
なるだろうなと思っています。

三浦 ではですね、いまの仮原稿のな
かから短歌作品を取りあげて、皆さん
でいろいろと感想なり話し合ってい
きたいなという風に思ってるんですけど。
朝さんの作品とかを中田さん、推して
ましたね。

中田 自分のなかで気になったのはや
っぱり朝さんなんですね。第1首めの、
耳を食むやさしき風も過去のもの（あ

の電線に止まる小鳥も

つていうのがありますけど。風と電線に止まる小鳥の対比っていうのが結構綺麗にコントラストがあつていいなと思いますね

犬飼 対比っていうのも朝さんの作品から確かに読み取れたなと思って。たとえばその次の短歌の、

名も知らぬ野火の名残りに憧れてましろに歩く海への道を

つていうのがあるんですけど。野火っていう単語が、それを抜いたらものすごい普通の日常のようなものを描写したのを思わせるんですけども、そこに野火という聞き慣れないけれども、なにかこう恐ろしくてみたいな。つまり、この世界のものではあるけども遠すぎない、日常と非日常を上手く繋ぐ、橋

渡しの単語を選んでおられるなと思いました。そういう言語のセンスがすごいあられる方なんだと思いました。

花島 第一印象で自分のなかでカテゴライズしたときに、たとえば立原道造なんかに近いなつて思いました。ただ、いまの歌はぱつと読んでぼくには意味が全然わからないんですけどね。そもそも野火に名前はないと思うし、ましろに歩くつていうのがどういう状況なのかちよつとよくわからない。ただ、そのまえの一首目では過去のものが歌われていて、そうした追憶とか憧憬とか、原理的に手の届かないものが、いま現在を充填しているというか、その分本来なら一番リアルなはずの現在、手の届くところにある世界が非常に希薄で、そういう超脱的なところが甘美で清潔な印象を与えていると思う。逆に言えば、それだけ生命感がないというか体温が低そうな感じというか、青

白い顔をしていそうというか、そういう意味でもいま言ったように立原道造とかそういうのと似た印象を受けますね。ぜんぶ読んでみないとわからないですけど。

朝 (追加コメント、特に気になった作品について) 一人に絞るのであれば、奏多めぐみさんの短歌のなかに特に好きなものが多かったように感じました。基本的に作品を鑑賞するときには、考えるな、感じろの姿勢を大切にしています。分析的に読むことが苦手なので、自然とそうなる、という話でもあるのですが。

帽子という一語は比喻だ、こうやって追い放たれた顔を匿う

とどまってばかりいるかないつのまにきみへの手紙棄ててしまった

摘みゆきて花のなまえを忘れたる男の
ひとりかくれんぼする

それでなお消えてゆくしかないという
声が聞えて来る棧橋へ

たまさかの光りのなかを鯁泳ぐいつか
のように泣いてみたいよ

わたしという一人称を切断する踏切あ
かず取り残されて

夜の蛇 わたしの首を絞めに来る殺意
を超えたやさしさなどと

短歌作品以外としては、帆場蔵人さん
の「邂逅とはかつての傷口をひとつこ
じ開ける簡単な作業」が特におもしろ
かったです。加えて、私は書くにも読
むにも批評は不得手ですが、歌誌の趣
旨的には花島大輔さんの「歌人素描」
が特に優れていたのではないかと感じ

ました。

鷹枕可（追加コメント、特に気になっ

た作品について） U-REIさまの、

神秘体験する電話ばかりの回転するデ

パート

きのゆき なんていったらいいのか。

正直なところあまり好きではないなっ
ていうのはどの作品も。私が結構じめ
っととしたタイプの人間なので、ひと
に接する部分だけでも軽くしようとし
て色々頑張るところを、なんかひ
とのウエッテイなものに触れると頑張
ってる部分が壊されるので、ちよつと
しんどいんです。なんかエモさみたい
なのが。なんでみんなそんなウエッテ
イにしたがるのかなっていうは思いま
すね。ひとの柔らかいところを受け入
れるだけの余裕がないので。どうです
か、みなさんって、ほかのひとのしん

どそうなところをひたすら見て精神的
に参りませんか。

柳煙 創作物でわざわざ悲劇的なもの
を見て悲しむことは、自分が不幸にな
るだけなのかもしれないです。

ryinx きのゆきさんのご意見が、ひと

と接する部分だけでも頑張ろうとして
いるところに、ウエッテイのね、しん
どい部分、辛い部分を投げかけるのか。
うんと、投げかけた場合はちよつと、
ちがって来るんじゃないかなって。ひ
とに向けて投げかけるんじゃないって、
そのひとがそうせざるを得ない状況で
ただやってみたいな、そういったイ
メージですかね。僕の短歌に限らず創
作物、ほんとにそうせざるを得なくて、
表現に収まっていたらそうだったんだ
っていうふうに感じるんですよ。それ
はまたちよつと先の話からずれてしま
いましたけど。簡単にたとえばウエッ

トであるとか辛いとか苦しいっていうのをひとに対して、辛い自分があるんですけどっていうふうにはアピールしたりとかっていうような用法みたいなのはあまりひとに共感を得られないと思います。

うたたね きのゆきさんのいつてはることも一定程度わかるし、きのゆきさんがすごく優しいひとやから、そういつてはるんだらうなど僕は思ってるんですけど。ただTynxさんのいわはるように凶らずもそうしてしまったというひとつで短歌にかぎらず、特に芸術というか美術の方にすごく多いんです。だからアウトサイダーアートみたいなものもでてくる。つまり、本人はそのつもりは全然なかったんだけど、そういう活動をしてしまっていて、まわりがむしろその凄さに気づいて評価し始めるみたいな。だから「私を見て！」的ななにか、そういった感じの

ものか、ちょっとそのあたりのニュアンスはいま聞いてるだけでは計りかねるところもあるんですけども、大丈夫だろうという気はします。少なくとも僕は大丈夫ですね、どんとこいです。カウンセリングみたいになっても大丈夫ですよ。

三浦 犬飼さんにもう一回、これ話ふりたいところもあるんですけど。たとえば俺は中田さんの短歌しかあんまり読んだことないんだけど、中田さんの短歌がしんどいかどうかっていうとね、そのしんどさが楽しめるっていうところがあつたりするんすよね。

犬飼 ひとの作品を見てしんどいか否かですよ。それを自分で感じて演じて、身ぶり手ぶりで示して、共感を得るっていうのもやり方のひとつだと思うんですよ。ひとの共感を得難いという作品で今回、おもしろかったのは

鷹枕可さんの短歌なんですけども。彼のことは知ってるんですけども、短歌はどういうのを創らはるんやろうと思つて読んでみたんですね。これはわからないです、僕にはまったく。いや、わかると思うんですよ。でも、一読しただけでわからないと思うんですよ。たとえば、

小約翰まぎらはしくも膳本へ添ゆる叙階もみわけがたかり

とかはヨハネつて小もいるんだみたいな。そういう意味でひとに難解さっていうのをアピールしたがるのかどうかっての僕はわからないんですよ、彼の真意は。だけど、そう読み取られても仕方がないと思いますね。つまり、ひとつっていうのは作品に通してなにかアピールがしたいと思うんですよ。自分の苦しみとか、自分の知恵を持つてしてその難解さを示すこととか。ただ、

それをやりすぎると良くないなというのはわかりますね。僕の好きな言葉があつて、つくつて頑張つてゐる際の汗を見してはいけない、というのは結構自分のなかでは大事にしてゐるんですけども。その汗に類似するような自分の苦しみの演技だったり、難解さを振りかざすようなものは一読しただけでわからないですね。本当か否か、狙つてやつてるのか偽りなのかわからないですね。だから、それを考えると短歌としておもしろいんですけども、一蹴されてしまう可能性もあるなつていうのを考えると悲しい作品やなつていうのも思います。

中田 私正直いって内容はさっぱりわかんないんですよ、これに関していっちゃうとね。送られてきてインパクトが大きくあつたんで、目玉になるかなつて思つて入れてみたつて感じなんですけど。すごく塚本邦雄っぽいなつ

て思つたんですけど。もしかしたら、それは彼の銜いなのかもしれないけど、これだけその銜いも度を超してしまつておもしろいかな、ユーモアかなと思つてるんですよ。それで入れましたね。きのゆさんのしんどいつていう話がありましたが、やっぱり自分としては屈折してゐる人間のほうがおもしろいなと思つてゐます。ある程度屈折しないと表現者としてはやつていけないだろうなと思つてゐるし。まあ、あんまり、そのまま逸脱してしまつて悪いんですけど、ある程度、逸脱してしまつた人間のほうに惹かれてしまつていう心情がどうしてもありますね。そこらへんは否定できません。自分自身がいふ社会からはみだしてしまつた存在なので、そこにやつぱりシンパシーつていうのを憶えてしまいますね。それがどうしても表現の核つていうか、中心になつてゐるつていうのが現在です。

きのゆき 表現者としてはともかく、そのひとには表現者じゃない部分も当然あるわけで。短歌をそういうふうに使つてゐるのはそのひとの表現者以外の部分を壊しかねない危ういことだと思つてゐるんです。特に定型つていうのは、ある意味命綱みたいなもので、定型に収めようという理性が働いてゐるうちは、そういう暗い面との折り合いというかバランスを取る役に立つてゐるんですけど、最近はそうじゃないわけですね。そう考えると短歌を詠めば詠むほどその感覚とか感情に縛りつけられてしまふ。もどつて来られない状態になつてしまふんじゃないかな。そうなるつと読者としては関わりたくないでおこつて切り捨て方もできるんですけど、そのひと自身はそのひと自身に向き合いつづけていかなきゃいけないので知らないところで、ひとが潰れてゆくのは悲しいかなとは思つてゐます。あと、屈折

してる人間がおもしろいってというのはあるんですけど、なんでみんな負の方向に屈折しちゃうのかな、っていうのはありますね。それって社会にこう屈折すべきと与えられた屈折なんじゃないかな、と。この屈折の仕方がほんとうにそのひと自身のものなら、もっとポジティブな方向だったりしてもいいはずなんですけど。

三浦 きのゆきさん、もう一つちょっとお聞きしていいですか。中田満帆さんの短歌はどうですか。

きのゆき ちゃんと、わりと定型にはまってる、ちゃんとバランス取れてるひとだなんていうのはありますね。暗いんだけど溺れきらないようにちゃんと折り合いがついてると思います。

三浦 今回、花鳥さんのほうで中田満帆さんの作品、取りあげていただいて

ますけども、いまのしんどい云々のことも含めていかがでしょうか。

花鳥 僕としてはあんまり作者自体には興味がないです。読んで自分がどれだけ解放されるかっていうのが読者として一番大きいので。なんていうんですかね、作者自身がどれだけ内面的に屈折していても、それは僕はどうでもいいというか、関心の持ちようがない。

たとえば中田さんの作品でいえば、そこはかなり意図的に自分との距離感を取っているなっていうふうに思ってます、そういうところを見ても、寺山修司から始めたっていうのはわかるような気がします。わりと自己演出がしっかりしてるんじゃないかなと、逆にいえば、そういう疑いを僕は持つてますけどね、作品を読むかぎり。ほかのひとはそう思わないんですかね、わりとストレートに繋げてるんですか、作者と作品を。表現が屈折してても、それ

は文学的なスタイル、ひとつの意匠にすぎないという感じがするんです。

中田 きのゆきさんのいったポジティブな方向に屈折できないのかっていう話ですけどね。出来はするんだろうけど、なんかあまりそれが自分に似合わないって感じがするんですよ、どうもなんていうか、正直いって根暗なほうなんで、あんまり明るくなれないっていうね。だからそういうのをたとえば真似してみたりもするんですけど、自分に似合わない服を着てるなっていう感じで、肌合わないんで脱いでしまいうっていうかたちですね。気持ちの上がり下がりについていうのもありますし、文学的に技巧の面で右に寄ったり左に寄ったりしてもあるんですけど、結局自分の立ち位置っていうのは今回つくった歌のようなもので、それ以上はでないかなって感じですね。柳煙さんの作品についてなんですけど、正直

読んでいて、いまずぐには答えがでない感じですよ。

三浦 柳煙さんは、ほとんど短歌を初めて書いたっていうところに近いほうなんですけども。この柳煙さんの作品について、きのゆきさんどうですか。

きのゆき ちゃんと五・七・五・七・

七に納めてるのは立派だと思います。

で、読んでても柳煙さんが悪いというより、短歌を詩の一種だと思ってるひとたち全般にいえることなんですけど、読んで一瞬間のなかにながが過ってそのまま消えて記憶に残らない感じがしますね。明確な像を残さないの記憶に残らないっていう。定型のリズムはもともとそれだけで記憶しやすいはずですが、五・七・五・七・七になってるはずなのに記憶に残らないっていうのかとも思いますね。私が単純に文章を一字一句覚えるのが苦手なタイ

プで、頭のなかにイメージを浮かべて、そのイメージを覚えて、必要があれば言語に直してほぼおなじ文章を取りだすっていうようなことをしてるので、イメージが湧かない言葉の羅列っていうのは記憶できないんです。だから私にはこういう短歌って難しいなと思います。

三浦 私も詩の短いものが短歌っていうふうに分けがいていた人間なんですけども、これについてうたたねさん、お願いします。

うたたね 仔細に柳煙さんの短歌を読ませていただいたて腑に落ちるところがあったんで、ちょっといいたいなと思うんですけど。きのゆきさんと僕の感覚は似てるように思うんです。たしかに柳煙さんの作品は何かイメージで動いてるというよりは、映画のモンタージュみたいなものに近い。カットを

繋げて意味をつくってるみたいなの。だからじゃないかな、「実際あんまり音とかを気にしないんです」って最初にいわはったのも。僕はそれはどんな感じですかって聞いたのが、この短歌を見てもすぐわかった気がしました。でも、これ、なんていうんだろう。これはイメージというより、なんていったらいいんだろう。

きのゆき なんかいんな概念をひたすら連続で差しだされたような感じで。

うたたね どうなんだろうな、シニフィアンとかいいたくないし。

きのゆき 概念と概念のあいだに繋がるの必然性がなくて。パターンとして、言葉の繋がりのパターンとして、ほぼ遷移確率が0みたいなものを連続されてるので、すぐく負担がかかる感じがします。

うたたね ブニエルの『アンダルシアの犬』っていう映画をご覧になった方おられますか？あれみたいな感じですね。

中田 一つ一つのイメージっていうのが湧くんですけどね、言葉に対しては。ただ、意味っていうものが逃げてしまってる感じがしますね。

うたたね だから、すごくおもしろい短歌だとは思いますが、そういう弱点みたいなのはあります。

柳煙 現代短歌が詩の圧縮と確かに私たち自由詩界隈の人間は捉えがちですけど。じゃあ、現代短歌の人たちは小説の圧縮と捉えてるんじゃないかなっていう気もします。

うたたね 僕は小説ともまたちがうと

は思います。特にきのゆきさんがいわはったのは小説とはまったくちがうと思います。ただ今回、僕が寄稿した短歌は、ひよっとしたら小説の短縮かもしれませぬ。そこらへんは未熟者というところでご容赦いただければ。

花島 僕もまだ全部に目を通してないんであれなんですけど、いまの柳煙さんののは一種のファンタジーとして読めば結構いい作品もあるように思ってますが。イメージとしてはわかりやすいです。

宝石の零れる夜に盗賊が倒れるのは満月のせい

いま現代短歌の話ができましたけど、僕も不勉強で、本当は『文學界』と『現代詩手帖』の短歌特集の感想を書いた原稿もあって、悪口が多い感じのやつだったんですけど、その特集を読んだ

かぎりでは現代短歌ってわりと奇想とゆうんですかね、ナンセンスとかファンタジーなものとか、小説まで行かなくても日常的なものでちょっとした違和感をクローズアップしたりとか、大喜利っぽいのが多いなと思ったんで、そういうのに比べたらか鷹枕可さんの作品とかなに書いているのか、キリスト教のこと書いているのか、全然わからないですけど、こういうほうがわりと好みには近いと思います。

三浦 いまの現時点での仮原稿が、この媚びない、辛口でいいんじゃないかっていうことも含めて、いまの仮原稿全体としての印象を語っていただきたいかな、というふうに思いますので、まづうろ子さんからいきましよう。

犬飼 媚びないっていうのは全体の雰囲気からわかりましたね。扱われている点は僕自身も扱ったキリスト教のこ

とがでてきたりとか。ちょっと理解できないうんじやないかみたいなの、ここ難しい専門知識があるのか、みたいな雰囲気もあるんですけども。その近づき

えない魅力っていうのはおもしろいかなと思えますね。でも、それが単なるコンセプトアルアートみたい提出されて終わりみたいになっちゃいけないと思うんですよ。たとえばさつき柳煙さんが話にでてましたけど、柳煙さんの作品にはひらがなばかりの作品もあったと思うんですよ。これって目新しさはともあると思うんですけども、だされたら終わってしまうふうに、つまりデュシャンが『泉』をだしたときのように、頭のなかに概念があつてそれがおもしろければ作品自体は二の次だよなってしまいがちなんで、これから向けていく展望みたいな感じも含めて感想をいうと、しっかりとした実力を備えた上でこういうおもしろみを追求していくのがいいと

思いますし、ほかにはそういった原石みたいななんが認められる歌誌になるんじゃないかなと思つてますね。

三浦 本物っていうのをすごく今回『帆』は求められ、コンセプトとしてあるといういえばあると思うんですよ。オーセンティックという言葉で中田さんも表されてますけど、そういったところも含めて先にうたたねさん、いきましようか。

うたたね 本物っていうのはすごくわかる気がします。先ほどちらつとでたネットをよくみんながやってる大喜利みたいな。あるいは近年、配信アプリの中で配信者さんがお題をだして、みなで答えてるみたいなのところでも短歌が詠まれてるらしいですけど、ああいう雰囲気のものとは全然まったく違うので、ホントにその通りだと思いません。鷹枕可さんの短歌ですが、おそら

くですけど、彼のなかでの（独自の）世界観か、または僕たちがあまり知らないキリスト教の文化があつての作品だと、僕は勝手に思つてます。どうも短歌はすぐにこう、先人の方々の文化を教養として持つておくべきとする傾向があると思うんですけど、いやいや逆に僕らの文化も教養として知ってくれよ、というか、こっちのほうにも来いやつていう。そういうもの（言外の意）もあるのかな、とか思つたり。僕が評論のほうで書いた水野しずさんなんかは、'80年代の村上春樹が『ダンス・ダンス・ダンス』でマリメッコや、カルヴァン・クラインといったブランド名をそのまま書きちゃつたのに似てて、『バーガーキングに行きたがるなよ』って短歌が平気であつたりします。そのバーガーキングって京都にはほとんどないので、そのニュアンスってなんかピンと来ないんですよ。神戸にはあるけど、そっちではどういふ扱いな

んかな？ バーガーキングはなんて。僕たちでもこれだから、年配のひとなんかはむしろ街で勉強せんとアカンみたいな、そういったことに挑戦している面もあるかというふうに思うと、教養を示す側の逆転っていうのもおもしろいよねってすごく感じると思います。

花島 僕は今回いろいろ読んだり調べたりしたんですけど、現行の現代短歌っていうのがぜんぜんおもしろくなかったというのがあって、その点、ぼくの原稿もそうですけど、もっと論争的な感じでもよかったかなとは思うんですね。ただなんていうんですか、いま選挙やってますけど、泡沫政党とか大向こうを狙ったようなパフォーマンスっていうのは黙殺されるだけなので、僕自身もう少し勉強したかったですけど、それは今後の宿題というふうに個人的には思っています。でも、いまの状態でもざっと見た感じでいえば、

結構立場というのは鮮明にはでてるかなと思うんですね。要は否定というか、いまの流れには迎合しないっていう姿勢は打ちだせているのではないかと。

朝（追加コメント、歌誌全体を通しての感想） まず、前提として私自身が、意味という面ではかなり共感性の低い短歌を詠んでいるのだろう、という認識があったので、歌誌に誘われるということ自体に少しばかり驚きました。しかし、主宰である中田満帆さんが書いた序文を読んでもみると、この歌誌であればなるほど、と思わされる場所がありました。

《わたしがいま望むのは胸が痛くなるほどに詠み手の内奥が剥きだしになった歌、孤立を超えてゆく愉楽を伴った歌である。静寂を突き破って聴くならば、そんな歌こそが必要におもわれるからだ》。

私個人としては、ある種の孤立を長らく引き受けつつも、同時に大きなものに繋がっているという一見矛盾した立場に立っているような感覚があります。しかし、それは繋がりが少ない厳しい孤立を通過した結果、わずかに得たものだとも思っています。作風は激しくないと思いますが、激しさを通過してきたつもりです。そして、私以外の寄稿者の短歌や文章も、それだけのオリジナルな孤立や孤独を感じさせるものだったように思います。そしてその集合体は、編輯後記にもあるように、全体として多少チグハグな様相を見せていたかも知れません。しかし、完璧な船出など、この油断ならない、しかし愛すべき不確実性に満ちた世界にどれだけあるだろう、と思います。というわけで『帆』が無事に発行され、そのあともこの貴重な活動がつづくことになるといいな、と願っております。

鷹枕可（追加コメント、歌誌全体を通しての感想） 覆された宝石群の種子を蒔く、幾つもの手と手の繋がり。可能性の余白。

tyinx 自分が短歌これから読まなきゃなって思いましたね。詩ばっか読んでたんで。短歌っていうのは詩とちがうものだっていうその認識が感触としてわからないんですね。定型で収めるってのは命綱っていう意見が印象的でした。あとは詩なんか見ても感じるんですけど、やっぱり距離感っていうワードも出たと思うんですけど、距離感っていうのも大切だと思うんですけどね。感覚的な世界の距離感っていう言葉。いまは僕は言葉が発してるので、物理的な距離とかそういうんじゃないかと、軽く触れて去っていくとか、もう少しし音を消すとか。なんだろう。少し石ころを蹴ってみるとか。なんかそ

ういった感じの感覚的なものなんです。そういういろんなイメージとか感覚じゃないですか。短歌の場合、どうなんだろうなってのはまずあって。ただ、定型っていうのは命綱だからっていう、話は確かにそうかもしれないって思いました。その表現っていうふうにいきますけど、そのどうしても持続的に、反復的に、逸脱的な方向にいくとする場合に道をまちがえてしまうと迷路みたいなのところにいつっちゃうような気もしないではないですけど。個人的にこれは詩集の話なんですけれども、中田さんの詩集とかは安心して読めますね。やっぱり逸脱っていうか、普通にいいなって読める。

きのゆき みなさん、短歌をそれぞれ自分の思うかぎりの手法で出力されるはずで、これは紙面構成の限界っていうものの影響も受けているんじゃないんですけど、なんかもっと自由にな

ればいいのになとは思いますが。大勢集まってるわりに、みんなおなじようなところにおなじように収まってるのが気になったかなっていう感じですね。自由律だったりいちじるしい破調だったり形式のところでは自由にしているわりに内容だったり方向性だったり自由になれてないっていうのをわかってるのかなとは思いました。

うたたね ああ、きのゆきさんに先にいわれてしまった。さっき定型って命綱だよっていわはったのは、（それを頼りに）もつといこうとすれば、いけるところがあるってことですよ。ポジティブ（な方向への屈折）っていうのは、そういうことだったのか、と思しながら、そのところ最後にもう少し深く話せたらなど。それこそ共有ではないんですけど、みんな、おなじ根っこのようなものは持つておいたほうがいいのかな、というところはあります。

その上で初めて、なんかトンデモないところへ冒険もできると思うので、機会があれば話してもらえるとおもしろいだろうと思いました。僕はそこだけちよつと残念だったかな。

三浦 ありがとうございます。では、

中田さん、最後になりますが、よろしくお願いします。

中田 今回、だいぶ場当たりのにやっってしまった部分も多分にあるんですね。人選を含めてそうですけど。自分にあんまり短歌をやってる知り合いもいないっていう状況でスタートしたんで、それぞれの方向性っていうのはあんま

り統一できなかつたのもあります。さつきいった自由さが無いっていうのもわかるんですよ。結果的におなじようなひとが集まってしまったっていうのは、多様なひとを取り込めなかつたっていうのは、やっぱり自分の人望のなさっていうのが第一にあるんですね。だから、そこらへんは今後の反省材料として捉えていく必要が充分ありますね。これからのヴィジョン、あるいは企みを見定める想像力を持ちたいです。

(22年6月25日23時〜26日2時・収録)

○参加者來歴

U-REI '88年、石川県生まれ。仙台市在住。中学時代より写真を始め。大学中退後、印刷工場に勤む傍ら、短歌を詠む。自主制作の写真集に『mooch』（白石竜生名義*絶版）がある。

うたたね 宥樹 ヒトです、ただのヒトです。歴史に名を残すこともない単なるヒトです。ふだんTwitterで自由律俳句を折にふれて呟いています。ナントカの手習いで最近、球体関節人形の制作もはじめました。不得手な短歌ですが、表すべきものを表せていれば望外の喜びです。

奏多めぐみ '94年生まれ。美術学校在学中に精神疾患を発症、入院中に作業療法として短歌を始める。現在、変名での投稿活動をしながら作業所に通所。本名での発表は今回が初めて。

朝 '90年生まれ、北海道出身、大阪市在住。男性。'20年に詩作を始め、同時期に短歌も詠み始める。

手塚雄呂血 '82年生まれ。堺市在住。自称・古書蒐集家。塚本邦雄と吉岡実が好き。

皆川健二 青森県東津軽郡出身、東京都在住。商業施設警備員。

柳煙 中学卒業。月収3万円。乙女座。

きのゆきこまち 五・七・五・七・七の箱庭を迷い歩きつけて10年になる。

鷹枕可 短歌集団『かばん』に'06年から'10年迄、別名義にて参加。疾病の為退会。以降、在野歌人として詩、そして短歌を捻る日。

帆場蔵人 詩を書き歌を詠む人。現代詩投稿サイト『B-RE VIEW』の元運営だが現代詩は書けない。《山鳥のように素直でありたい。太陽が上がって目覚め、日が沈んで眠る山鳥のように。この自然に対する素直さだけが美の発見者である》という魯山人に惹かれて生きている。

安西大樹 年齢不詳。早稲田大学詩人会出身のネット詩人。哲楽者でセラピスト。中城ふみ子賞佳作。歌詠みとして最強

の新聞歌人。結社未所属。著作、そんなものはない。Twitter: @marginalman

帛門臣昂 '02年、兵庫県生まれ。詩人。個人詩誌『卵』発行、画家NEKO氏とのコラボレーション企画『NEKO&POET』参加。別名義で結社所属、歌人として活動。

花島大輔 '80年、千葉県生まれ、東京都在住。死亡年月日は不詳。学歴、職歴、病歴、犯罪歴、どれもいうべきものはない。計画していたハート・クレイン論が頓挫したため、文学上の履歴もいまだ空白のままである。

犬飼うろ子 '98年、京都府宇治市生まれ。同志社大学神学部神学科中退。詩人。詩誌『mare』同人。

井上橙子 ぼつりぼつり文章を書いています。『NEKO&POET』参加、個人詩誌『投ビン通信・零号』発行（ネットプリント） Twitter: @hosinofune02212

下山陽造 '91年生まれ。ノンポリテイカル、反緊縮派。べつにこれとっていいたいことがあるわけでもない。邦画好き。

中田満帆 '84年、兵庫県西脇市生まれ、神戸市出身・在住。夜間高校卒業。詩人・歌人・画家ほか、複数のジャンルで活動。'04年より詩人・童話作家森忠明に師事。出版局「a mi sing person's press」主宰・発行人。詩集『38Wの紙片』、歌集『星蝕詠嘆集／Eclipse Arioso』ほか、著作多数。

編輯後記

ようやく初号がでる。はじめて歌誌の話をもらってから、もう2年もが経っていた。まだひとつの流派としての顔はないが、多くの出会いを産んだことはたしかだ。まだまだ産毛のような出会いだが。

かつてわたしは、『新アララギ』で短歌を発表していた。そして写真一筋の流派に厭気が差してでていった。次回からは鷹枕可氏の提案による、「詩人による短歌」、そして「ハイティーン短歌」の募集をはじめ。わたしがかつて味わったような厭気を感じさせないつくりを努めたい。

個人的に今回の収穫は朝氏、鷹枕可氏の作品、花島大輔氏、犬飼うろ子氏の批評だった。もちろん、裏方で尽力してくださった三浦果実氏との関係もそうだ。短歌による反時代的な声をこれからもっと拾っていきたいとおもう。昨今の時代と添い寝をするような歌には倦いてしまった。定型に収めるだけでは詩文学とはいえない。短歌は孤独の文学なのだ。

この度は参加してくださった諸氏にただただ感謝あるのみだ。しばらくはこの歌誌をつづける。そしてより多くの孤絶した表現者と繋がっていきたいとおもう。なににより、わたし自身が孤絶のなかに存って、自己韜晦にまみれている。それ

を突き破って、あまりあるほどの熱量をだしたい。たった三十一文字の文学のなかには、その可能性がある。育ちすぎた梨の木が反逆を始めるように、わたしは若い晩年のなかで歌を詠む。そしてそれが自然の法則であるかのようにひとと街を繋げるのを待っている。

しかし、今回はやや自由や多様性に欠けていたようにおもう。そもそも寄稿者集めが非常に場当たり的で、綿密ではなかった。本来の趣旨とはちがう歌人もいれば、その趣旨に疑問を抱く歌人もいるのである。こういった問題ははずれ解消されるべきだが、今回はどうか赦して欲しい。わたしは歌人との繋がりに弱い。そんな男が短歌史に報いることができるだろうか。いまはまだわからない。叙述と錯乱のなかを歩き、いまはできることをやるだけだ。来春には第2号をだしたい。これは儂い欲望だろうか。

ともかく、この歌誌『帆』が頒布され、どれほどの戦果をあげるのかを見とどけようとおもっている。

'22年、7月 主宰人

告知〇ハイティーン歌集・募集！

★

'68年、歌人・詩人・劇作家⇨寺山修司による『ハイティーン詩集』から、およそ半世紀年となる'22年、あらたな企みが立ちあがる。その目的は、15才から19才までの短歌をあつめて歌集をつくること。主宰人・中田満帆（詩人・童話作家⇨森忠明に師事、寺山修司門下）による、新世代の古今和歌集！

★

歌え！

詠え！

★

応募先：mitzho84@gmail.com

本文に作品、末尾に本名もしくはペンネーム、年齢。住所・電話など個人情報に記載する必要はありません。優秀者には粗品（寺山修司作品及び関連書籍）を進呈します。作品は、当歌誌にて次号より発表・掲載致します。

★

歌誌「帆」《初号》 2022 夏

写真・編輯・発行人——中田満帆
広報・原稿協力・制作補助——三浦果実
座談文字起こし——犬飼うろ子
装丁——ryinx

発行日——2022年7月14日
発行所——a missing person's press

〒651-0092 神戸市中央区生田町1-1-13 新神戸マンション北館303号
[電話] 078-200-6874 [Mail] mitzho84@gmail.com

Copyright © a missing person's press 2022